

新町遺跡

—福岡県糸島郡志摩町所在墳墓群の調査—

II

志摩町文化財調査報告書

第 8 集

1988

志摩町教育委員会



新町遺跡

—福岡県糸島郡志摩町所在墳墓群の調査—

II

志摩町文化財調査報告書

第 8 集

1988

志摩町教育委員会



a 遺跡遠望（西側より、可也山を望む）



b 遺跡遠望（東側より、引津湾を望む）



a 第1地点 全景



b 第1地点 13号墓



a 第1地点 18号墓



b II-05 トレンチ 2号甕棺墓



a 第1地点 18号墓下甕



c 第1地点 20号墓上甕



b 第1地点 25号墓下甕



d 第1地点 20号墓下甕



27



33



38



39



23



8

第1地点 副葬小壺 1



4-1



4-2



11



9



49

a 第1地点 副葬小壺 2



b II-01 1号墓甕棺

a
II—02
a
3号墓下甕



b
II—02
b
1号墓副葬小壺



c
II—05
1号甕棺墓上甕



d
II—05
1号甕棺墓下墓



e
II—05
2号甕棺墓上甕



f
II—05
2号甕棺墓下甕



g
II—09
1号墓上甕



h
II—09
1号墓下甕





e 御床松原・新町遺跡出土の半両銭・貨泉

序

昨年、弥生早期・前期の墳墓群の調査では、支石墓や甕棺墓・土壙墓等の埋葬形態や、出土した埋葬人骨は、私たちに、多くの学術的な資料を提供してくれました。

また、故人に供えられました副葬小壺の優美さは、太古の生活を感じさせ、一時の安らぎを与えてくれるようです。

今回の調査は、昨年度の成果に基づいて、墓域の範囲確認を主眼において重要遺跡確認調査として実施しましたが、その周辺地域から支石墓群を取り囲むように弥生時代中期までの甕棺墓群が新たに検出され、新町遺跡の時期・範囲は拡大し、本遺跡一帯の重要性が、一層高まりました。

また、隣接する御床松原遺跡出土の「半両銭」「貨泉」とともに今回出土の「半両銭」は、当時の輸入貨幣の意義において重大な問題を投げかけているようです。

今後、私たちは、新町遺跡を弥生時代早期を代表する重要な遺跡の一つとして位置づけ、保存施策を講じ環境整備を行なっていく所存でございますので、皆様のご協力をお願いするとともに、本報告書が文化財保護思想の普及および研究資料として活用されることを念願いたします。

最後に、各方面から指導・助言をいただいた諸先生方、調査を担当された福岡教育事務所の橋口・池辺両氏、区長・地権者をはじめとする地元新町関係者各位の絶大なるご協力を得て、無事本年度の調査を完了できたことにたいし、衷心から感謝申し上げ序といたします。

昭和63年3月31日

志摩町教育委員会

教育長 矢野節雄

例　　言

1. この報告書は志摩町教育委員会が重要遺跡確認調査として国庫補助を受けて実施した、同町所在新町遺跡の第2次調査の記録である。
2. 出土人骨については九州大学医学部中橋孝博先生に鑑定をお願いした。
3. 遺構の実測は橋口達也・池辺元明・洞龍二郎が、遺物の実測は橋口が行ない、製図は豊福弥生・原カヨ子が行なった。
4. 遺構の写真撮影は橋口・池辺が行ない、遺物の写真撮影は九州歴史資料館の石丸洋が行なった。
5. 土器の復原作業は岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館で行なった。
6. 本書の執筆・編集は橋口が行なった。

本文目次

	頁
I. はじめに.....	1
II. 調査の内容.....	3
1. II-01トレンチ.....	3
2. II-02 a トレンチ.....	6
3. II-02 b トレンチ.....	8
4. II-03・05トレンチ.....	11
5. II-04トレンチ.....	20
6. II-06トレンチ.....	21
7. II-07トレンチ.....	22
8. II-08トレンチ.....	24
9. II-09トレンチ.....	25
10. II-10トレンチ.....	34
11. II-11トレンチ.....	39
12. II-12トレンチ.....	41
III. おわりに.....	43
1. 調査の成果と課題.....	43
2. 半両銭・貨泉について.....	45

図版目次

卷頭図版 1 a 遺跡遠望（西側より、可也山を望む）

 1 b 遺跡遠望（東側より、引津湾を望む）

卷頭図版 2 a 第1地点 全景

 2 b 第1地点 13号墓

卷頭図版 3 a 第1地点 18号墓

 3 b II-05 トレンチ 2号甕棺墓

卷頭図版 4 a 第1地点 18号墓下甕

 4 b 第1地点 25号墓下甕

- 4 c 第1地点 20号墓下甕
- 4 d 第1地点 20号墓下甕
- 卷頭図版5 第1地点 副葬小壺 1
- 卷頭図版6 a 第1地点 副葬小壺 2
- 6 b II-01 1号墓甕棺
- 卷頭図版7 a II-02 a 3号墓下甕
- 7 b II-02 b 1号墓副葬小壺
- 7 c II-05 1号甕棺墓上甕
- 7 d II-05 1号甕棺墓下甕
- 7 e II-05 2号甕棺墓上甕
- 7 f II-05 2号甕棺墓下甕
- 7 g II-09 1号墓上甕
- 7 h II-09 1号墓下甕
- 卷頭図版8 a II-09 5号墓上甕
- 8 b II-09 5号墓下甕
- 8 c II-10 1号墓上甕
- 8 d II-10 1号墓下甕
- 8 e 御床松原・新町遺跡出土の半両銭・貨泉
- 図版 1 a II-01 トレンチ
- 1 b II-01 トレンチ 上石破損状態
- 1 c II-01 トレンチ 1号墓
- 1 d II-01 トレンチ 1・2号墓
- 図版 2 a II-02 a トレンチ
- 2 b II-02 a トレンチ 1・3号墓
- 2 c II-02 a トレンチ 2号墓
- 2 d II-02 a トレンチ 3号墓
- 図版 3 a II-02 b トレンチ
- 3 b II-02 b トレンチ 1号墓
- 図版 4 a II-03・05 トレンチ
- 4 b II-05 トレンチ 1・2号甕棺墓
- 4 c II-05 トレンチ 1号甕棺墓
- 4 d II-05 トレンチ 2号甕棺墓
- 図版 5 a II-04 トレンチ

5 b II-06 トレンチ
5 c II-06 トレンチ東壁
5 d II-06 トレンチ西壁
5 e II-07 トレンチ
5 f II-08 トレンチ
5 g II-10 トレンチ

図 版 6 a II-09 トレンチ
6 b II-09 トレンチ 1号墓
6 c II-09 トレンチ 2号
6 d II-09 トレンチ 3号
6 e 半両銭出土状態

図 版 7 a II-09 トレンチ 1号墓
7 b II-09 トレンチ 1号墓
7 c II-09 トレンチ 5号墓
7 d II-09 トレンチ 5号墓
7 e II-10 トレンチ 1号墓
7 f II-10 トレンチ 1号墓
7 g II-12 トレンチ
7 h 半両銭

図 版 8 a II-01 1号墓甕棺のタタキ痕
8 b II-01 1号墓甕棺のタタキ痕
8 c II-09 1号墓上甕外面のタタキ痕
8 d 同上 内面のタタキアテ具痕

挿図目次

頁

第 1 図	遺跡位置図（縮尺1/75,000）	2
第 2 図	遺跡周辺地形図（縮尺1/5,000）	4
第 3 図	遺跡地形図（縮尺1/600）	折込
第 4 図	II-01トレンチ（縮尺1/50）	5
第 5 図	II-01トレンチ 1号墓実測図（縮尺1/20）	5

第 6 図	II-01 トレンチ 1 号墓 甕棺実測図（縮尺1/6）	6
第 7 図	II-02 a トレンチ（縮尺1/50）	7
第 8 図	II-02 a トレンチ 1・2 墓副葬小壺実測図（縮尺1/3）	8
第 9 図	II-02 a トレンチ 3 号墓実測図（縮尺1/20）	8
第 10 図	II-02 a トレンチ 3 号墓甕棺実測図（縮尺1/4）	9
第 11 図	II-02 b トレンチ（縮尺1/50）	9
第 12 図	II-02 b トレンチ 1 号墓実測図（縮尺1/30）	10
第 13 図	II-02 b トレンチ 1 号墓副葬小壺実測図（縮尺1/3）	10
第 14 図	II-02 b トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）	11
第 15 図	II-03・05 トレンチ 1（縮尺1/50）	12
第 15 図	II-03・05 トレンチ 2（縮尺1/50）	13
第 16 図	II-05 トレンチ 1・2 号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	15
第 17 図	II-05 トレンチ 1 号甕棺実測図（縮尺1/6）	16
第 18 図	II-05 トレンチ 2 号甕棺実測図（縮尺1/6）	18
第 19 図	II-03・05 トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）	19
第 20 図	II-04 トレンチ（縮尺1/50）	21
第 21 図	II-06 トレンチ（縮尺1/50）	22
第 22 図	II-06 トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）	23
第 23 図	II-07 トレンチ（縮尺1/50）	23
第 24 図	II-07 トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）	23
第 25 図	II-08 トレンチ（縮尺1/50）	24
第 26 図	II-08 トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）	24
第 27 図	II-09 トレンチ（縮尺1/50）	26
第 28 図	II-09 トレンチ 1 号墓実測図（縮尺1/20）	27
第 29 図	II-09 トレンチ 1 号墓甕棺実測図（縮尺1/6）	29
第 30 図	半両錢実測図（縮尺1/1）	30
第 31 図	II-09 トレンチ 5 号墓実測図（縮尺1/20）	30
第 32 図	II-09 トレンチ 5 号墓甕棺実測図（縮尺1/6）	31
第 33 図	II-09 トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）	32
第 34 図	II-09 トレンチ出土石器実測図（縮尺1/3）	35
第 35 図	II-10 トレンチ（縮尺1/50）	36
第 36 図	II-10 トレンチ 1 号墓実測図（縮尺1/20）	36
第 37 図	II-10 トレンチ 1 号墓甕棺実測図（縮尺1/6）	37

第 38 図	II-10 トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）	38
第 39 図	II-11 トレンチ（縮尺1/50）	39
第 40 図	II-11 トレンチ出土土器・石器実測図（縮尺1/3）	40
第 41 図	II-12 トレンチ（縮尺1/50）	42
第 42 図	II-12 トレンチ出土土器（縮尺1/3）	42
第 43 図	第2次調査出土のその他の遺物（縮尺1/2）	42
第 44 図	御床松原・新町遺跡出土の半両銭および貨泉（縮尺1/1）	46

I. はじめに

新町遺跡は福岡県糸島郡志摩町大字新町字ギ丁原に所在する。この遺跡は九大医学部病理学教室教授であった中山平次郎先生によって学会に紹介され、⁽¹⁾ 大正時代からひろく全国に知られるところであった。大字新町字ギ丁原71番地の畠には支石墓の上石と考えられる大石が露出しており、その近辺から1953(昭和28)年に2基の甕棺が発見されたと伝えられており、支石墓・甕棺墓等の存在が予測されていた。

たまたまこの大石の露出していた畠地に宅地建設が計画されたことが契機となって、重要遺跡確認調査として昭和61年度から志摩町が国庫補助を受けて発掘調査を開始した。昭和61年度の調査成果は既に報告書を刊行しているので詳細は省略するが、弥生早・前期の支石墓を含む57基の墳墓を検出し、その一部を発掘してこの時期のものとしてはじめてともいえる埋葬人骨を得るなど大きな成果を得た。また第1地点では弥生早期と弥生前期前半の墓域が副葬小壺によって区分され、その墓域の広がりを推定した。⁽²⁾

第2次調査は昭和62年10月12日から同年11月18日まで行なった。本年度の調査はさきに述べた第1次調査の成果をもとに、第一には弥生早期および弥生前期前半の墓域の広がりを確認することと、第二には新町遺跡全域での弥生時代墓地の時期的変遷を把握すること、第三にはこれらの墳墓を営んだ聚落をさがすことと水田と推定される部分の調査であった。第三に意図した点は発掘候補地を選定していたにもかかわらず時間的な制約等もあって今回は果せず又の機会に譲らざるを得なかった。

第2次調査においては上記の目的に沿って13ヶ所のトレーナーを設定し発掘した。第2次調査ということで頭にIIを冠し、01~12までの番号を付した。調査の内容については次章で詳しく述べる。

昭和62年度の調査は志摩町が事業主体となり経費を負担し、福岡県教育庁福岡教育事務所から調査担当職員を派遣して行なわれた。調査組織は下記のとおりである。

調査組織

総括	志摩町教育委員会	教育長	矢野 節雄
	"	教育課長	小金丸知男(前任)
	"	"	吉村 啓助(現任)
庶務	"	社会教育係長	青木 正美
	"	社会教育係	田中 茂子
調査・庶務	"	社会教育主事	洞 龍二郎



第1図 遺跡位置図（縮尺1/75,000）

- | | | | | | | |
|----------|-----------|------------|-------------|-----------|------------|-----------|
| 1.新町遺跡 | 2.御床松原 | 3.八熊遺跡 | 4.能添遺跡 | 5.大牟田遺跡 | 6.稻葉古墳 | 7.開1号墳 |
| 2.小田支石墓 | 9.桑原飛櫛貝塚 | 10.瓜生(尾)貝塚 | 11.泊大塚古墳 | 12.御道具山古墳 | 13.志登神社支石墓 | 14.志登支石墓群 |
| 15.浦志遺跡 | 16.有田1号墳 | 17.先山古墳 | 18.フレ塚古墳 | 19.日明17号墳 | 20.日明16号墳 | 21.日明13号墳 |
| 22.日明3号墳 | 23.日明11号墳 | 24.横枕古墳 | 25.東二塚古墳 | 26.釜塚古墳 | 27.銚子塚古墳 | 28.長石二塚古墳 |
| 29.曲り田遺跡 | 30.徳正寺古墳 | 31.塚田遺跡 | 32.鎮懸石八幡裏古墳 | | | |

調査担当 福岡県教育庁福岡教育事務所

社会教育課 技術主査 橋口達也

" " 池辺元明

なお、区長はじめ新町地区の方々の他、地元の皆さんには発掘調査に参加され、又諸々の御協力をいただき、感謝の念にたえない。

註1 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて一」考古学雑誌7-10

1917

中山平次郎「福岡地方に分布せる二系統の弥生式土器」考古学雑誌22-6 1932

2. 志摩町教育委員会「新町遺跡——福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査——」志摩町文化財調査報告書第7集 1987

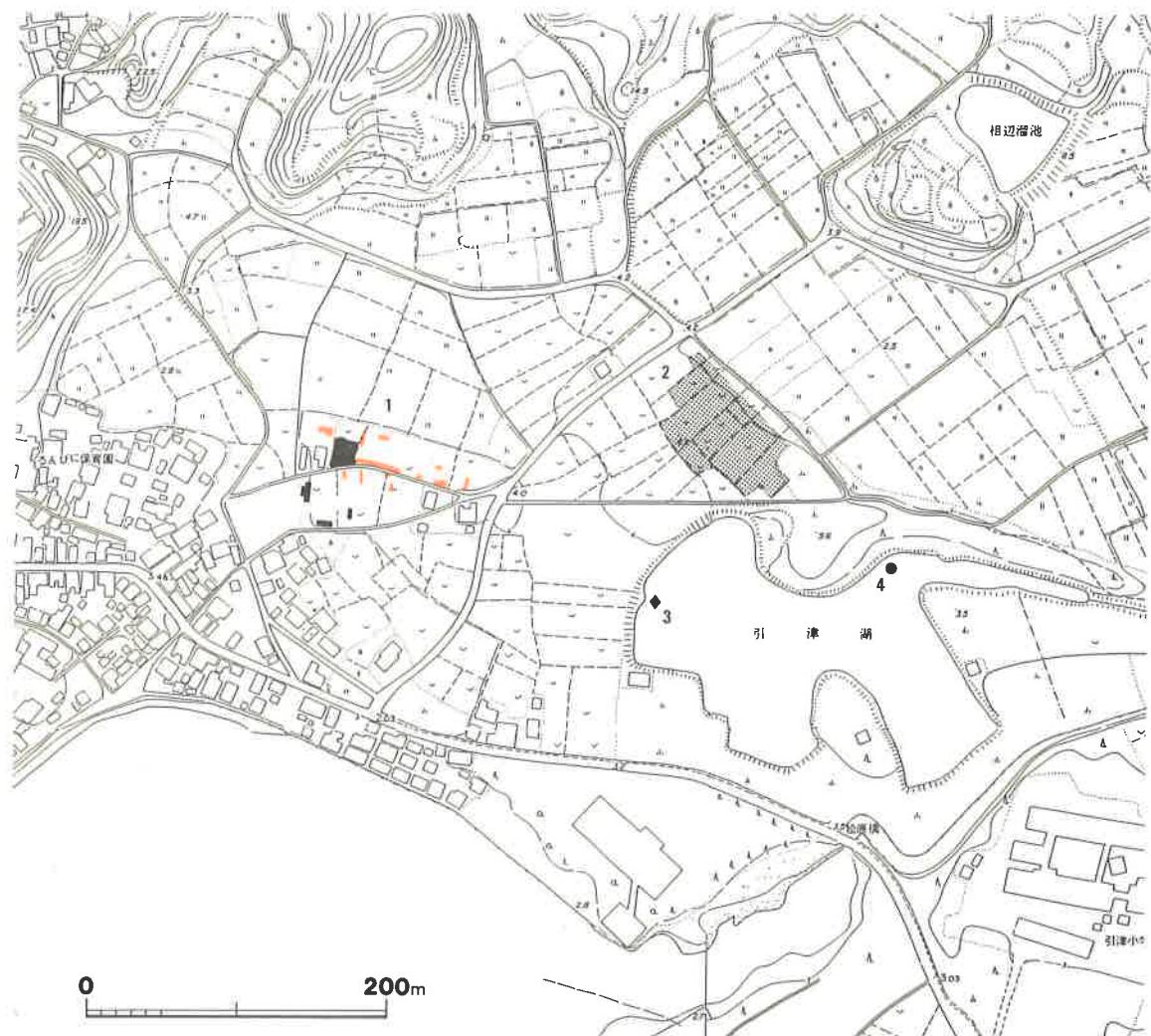
II. 調査の内容

第2次調査においてII-01～II-12まで13ヶ所のトレンチを設定して発掘した(第3図)。以下順次説明を加える。

1. II-01トレンチ

1) II-01トレンチ(第4図、図版1a)

弥生早期の墓域の西端を確認する目的で、第1次調査第1地点の西北に隣接した一段低い畠地にトレンチを設定した。当初東西方向に長さ8m、幅2mのトレンチを設け発掘すると、表土下約20cm程で須恵器・夜臼式土器・板付I式土器・鉄滓等が出土しあり、30～40cm下げるトレンチの東端に本来支石墓の上石であったと考えられる玄武岩の板石が粉々に破碎されたような状態で露わってきた(図版1b)。一部に支石らしき花崗岩礫もみられ、又この石の北端には大きな丹塗り磨研の壺もみられたので、この石の部分だけトレンチを拡幅し、石の平面図・断面図をとり、石を取りのぞいた結果は完全に破壊を受けたものと判断した。2号墓の上石であったものかと思われる。又長軸を東西にとる桁行の柱間6尺、梁行の柱間5尺の柱根を検出したが、これは近年まで存在した鶴舎のものであることは確実である。破碎された石を除去して遺構検出を行なうと、石の北端にみえていた大形壺は甕棺であり、その西南に接して支石と思われる花崗岩の35～40cm大程の礫2個が残る土壙墓が検出され、それぞれ1号・2号墓とし



第2図 遺跡周辺地形図（縮尺1/5,000）

1. 新町遺跡（黒…第1次 朱…第2次） 2. 御床松原遺跡
3. 鉄戈出土推定地（昭和38年） 4. 貨泉出土推定地（大正6年）

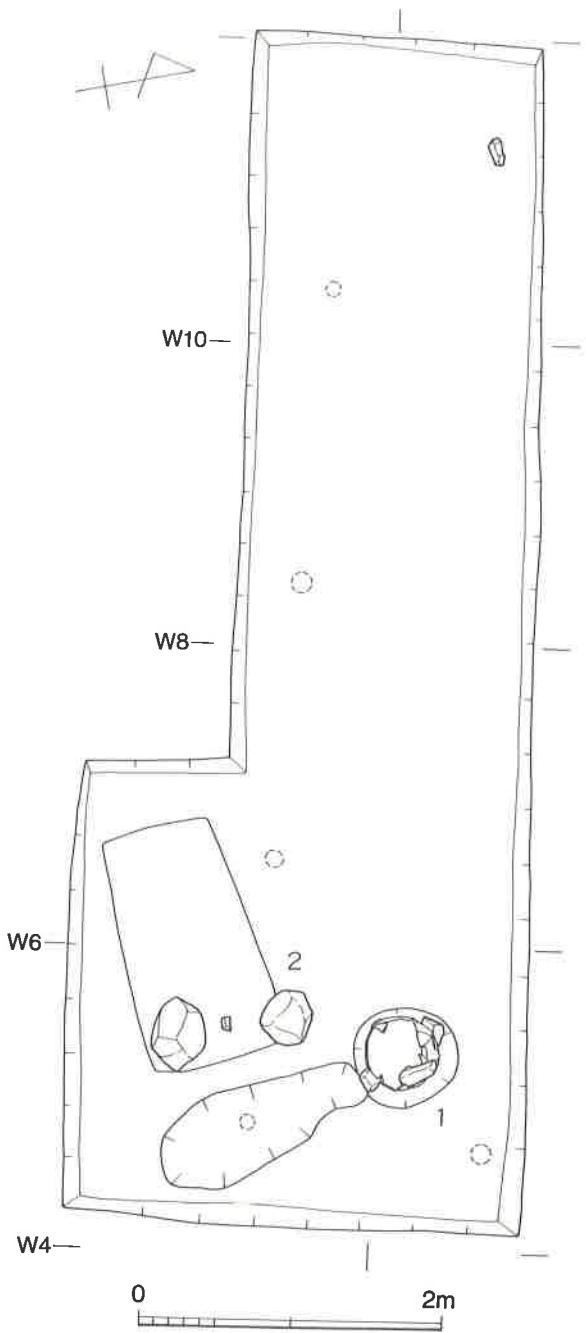
た。2号の土壙墓は軸をほぼ東西にとり長さ160cm、幅71~91cmを測り、土壙内には白いきれいな砂がつまっている。甕棺の南側、土壙墓の東側には長さ145cm、幅55cm程の小角礫を含む攪乱穴がみられた。これは上石を破碎した時のものであろう。又第43図1に示した滑石製紡錘車は表層出土のものであり、径4.4cm、高1.45cm、重さ46.3gを測る。

2) 1号墓（第5図、図版1c）

甕棺墓の主軸は東西方向から25°程北にふれている。上記の支石墓上石を破碎した際に上面がいくらか削平を受け、破碎された石の間に甕棺の破片が多くみられた。甕棺の口には25×13×



第3図 遺跡地形図（縮尺1/600）

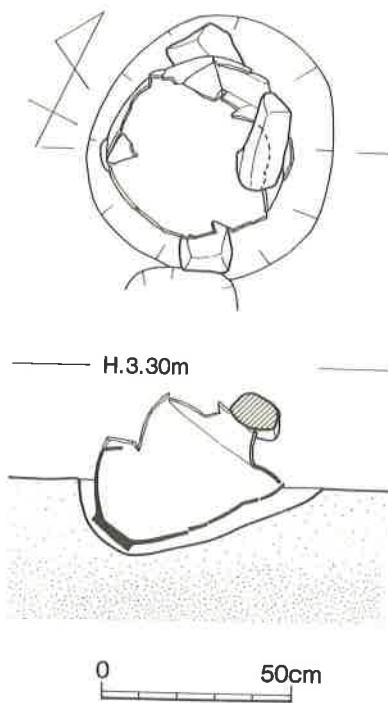


第4図 II-01トレンチ (縮尺1/50)

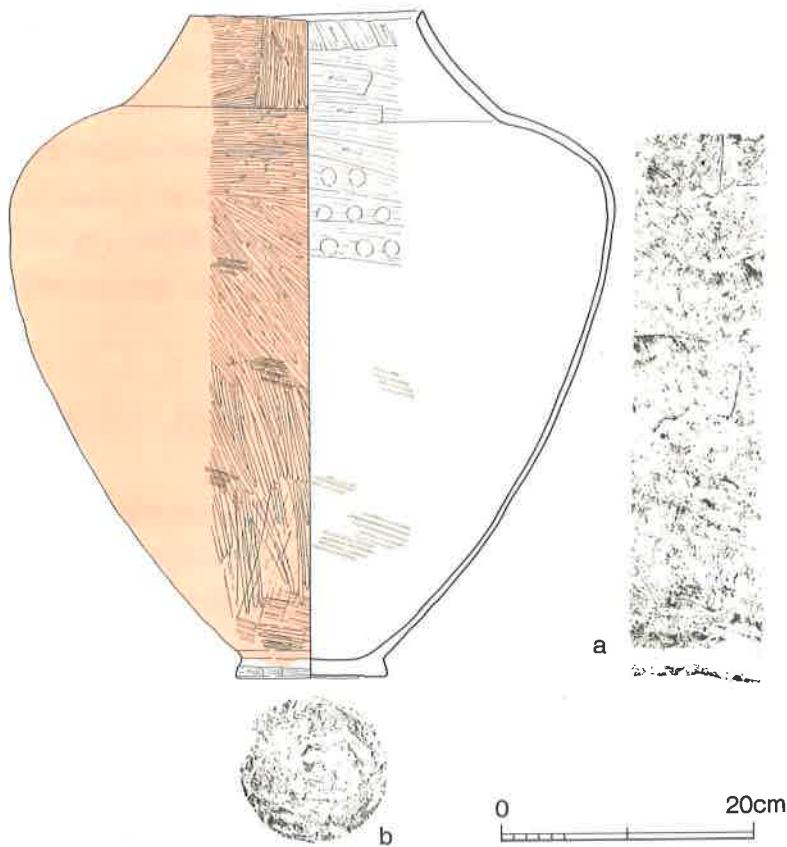
9cmの花崗岩の小礫が1個あったが、削平の状況から他に2・3個はあったものかとも思われる。甕棺は器高56~57cm程の丹塗り磨研大形壺の口縁を打欠いたものを用いている。まず、現存65×68cm程の円形の墓壙を掘り、甕棺を安定させるために15cm大の花崗岩礫を墓壙内に置き、甕棺を51°程のやや急な傾斜角で据えている。棺内からは何らも出土しなかつた。

3) 1号墓甕棺 (第6図、巻頭図版6b)

復原器高56~57cm程の丹塗り磨研大形壺の口縁を打欠いたもので現存高は52.5cmを測る。現存の口径は17cm程、肩部の径は30.8cm、胴部最大径は48.0cm、底径は12.1cmを



第5図 II-01トレンチ 1号墓実測図
(縮尺1/20)



第6図 II-01トレンチ1号墓蓋棺実測図（縮尺1/6）

られ、タタキの後擦過を施しミガキを加えたことがわかる。外底は擦過。胴部の内面は横方向の粗い条痕風の擦過を丁寧にナデ消す。肩部の内面は横方向の擦過がみられるがその下にタタキアテ具痕様の丸い凹面がかすかに認められる。同様の痕跡は内底にも認められる。指圧痕様にもみえるが図版8 dに同様の痕跡を示すように指圧痕とはちがう。外面にみられるタタキ痕と対応させてそのアテ具痕とみるのが妥当であろう。頸部内面の下位は横方向擦過、上位はその上にナデ風の縦方向擦過を加えている。器壁はきわめて薄く肩、胴部では3~4 mmである。地色は暗黄褐色、丹は暗赤色を呈する。胎土には石英粒をわずかに含み、焼成は硬く良好。

2. II-02 a トレンチ

1) II-02 a トレンチ (第7図、図版2)

弥生前期前半の墓域の南端を確認する目的で、第1次調査第1地点と道路をはさんで南側の

測る。頸は内に強く傾斜し、肩は強く張り、胴部最大径はきわめて高位置にあり古い要素を示している。橋口の編年による曲り田（新）式に属する。頸部は縦方向と横方向のミガキ、肩部は横方向のミガキ、胴部は斜・縦方向のミガキを施しているが、底部近くおよび胴部のミガキ下にタタキ痕と思われる痕跡が認められる。

（図版8 a・b）。底部付近には又削り風の擦過痕もみ

畠地に南北方向に長さ 5 m, 幅 2 m のトレンチを設けて発掘した(第 3 図)。発掘の結果は花崗岩の 20~30cm 大の礫を用い、石の間に副葬小壺の破片と思われる土器片がみられる墓標と考えられるものがトレンチの北寄りと南東側にあり、それぞれ 1 号墓・2 号墓とした。1 号墓の南東側に土師器の小形甕棺がありこれらを 3 号墓とした。墓域の南端を確認したとは言えないが、作物等との関係でさらに南へ拡張はできなかった。1・2 号墓は副葬小壺を取り上げたが内部は未掘。3 号墓の土師器甕棺は取り上げた。

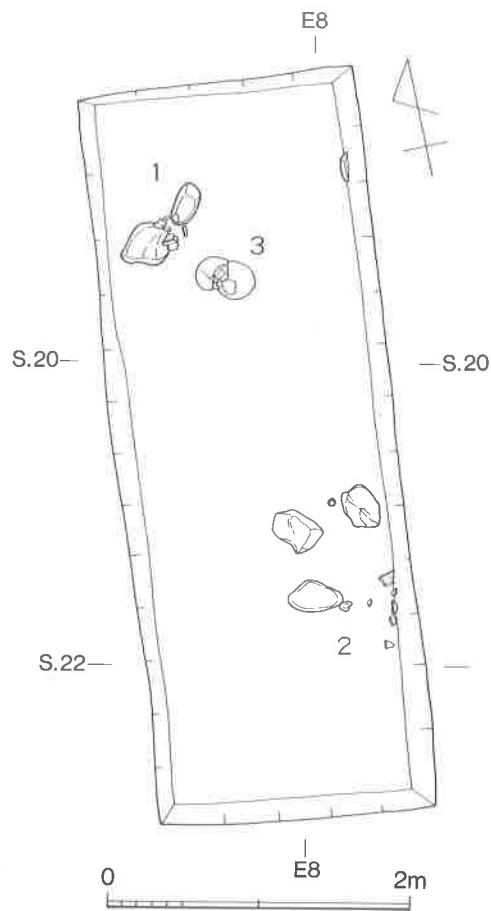
2) 副葬小壺 (第 8 図)

1 は 1 号墓の副葬小壺である。頸部から胴部にかけての破片である。図示したよりも下位の部分もあるが図化し得なかった。口縁を欠くが、口縁下の段および肩の段は不明瞭ながら認められる。外面から内面の口縁下は横の方向ミガキ、頸部下位および肩部内面は指圧痕が認められる。内面は黄白色、外面は淡茶色を呈し、胎土には石英と微細な金雲母片をやや多めに含み、焼成は良好であるが全体に風化がはなはだしい。板付 I 式というよりは板付 II 式に属するものであろう。

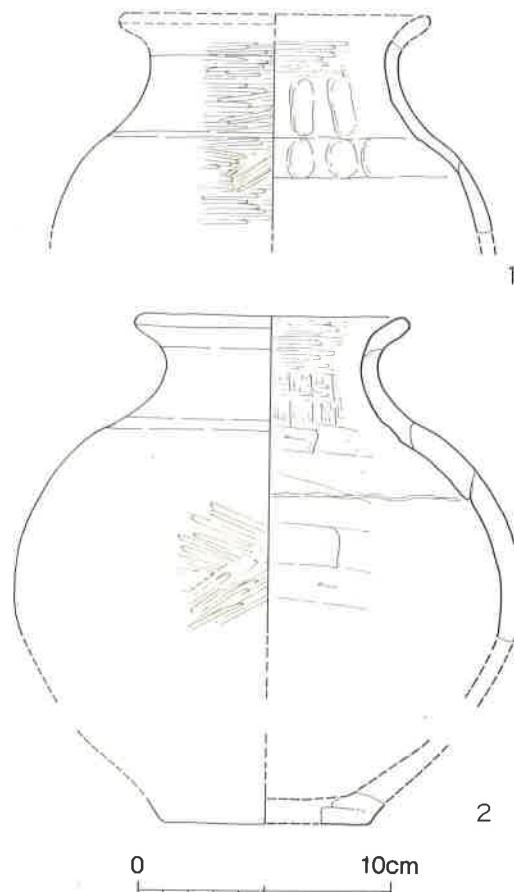
2 は 2 号墓の副葬小壺で胴下半を欠く。口径は 10.3cm。口縁下と肩は不明瞭ながら段をつくり、頸は短かく、胴部は球形をなす。外面から頸部内面はミガキ、胴部は斜方向、口・頸部は内外ともに横方向、頸部内面の下位は縦方向擦過にミガキを加える。胴部内面はナデ風の横方向擦過。淡黄褐色を呈し、胎土には石英と微細な金雲母片をやや多く含み、焼成は硬く良好。この壺も 1 と同様板付 I 式というよりも板付 II 式に属するものであろう。

3) 3 号墓 (第 9 図、図版 2 d)

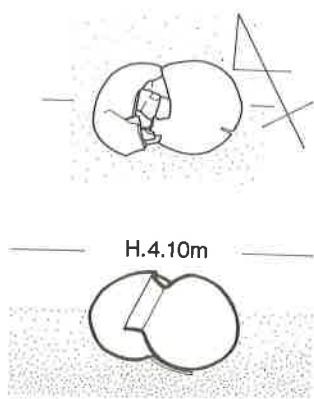
主軸は東西方向から 30° 程南へふれている。墓壙は確認できなかった。下甕の傾斜角は 23°、上甕は口縁を打欠き、又上甕の余った破片を下甕の下に敷いている。下甕の真横に円形の穿孔が



第 7 図 II-02a トレンチ (縮尺 1/50)



第8図 II-02eトレンチ1・2号墓副葬小壺 実測図(縮尺1/3)



第9図 II-02aトレンチ3号 弥生前期前半の墓域の東端をつかむ目的で設定したII-03トレンチにおいて、当初予測していたよりも墓域が東側にのびた

ある。他に縦方向に穴があったが、これは埋葬時のものというよりも鍬先等のあたった痕跡かと考えられる。

4) 3号墓甕棺(第10図、巻頭図版7a)

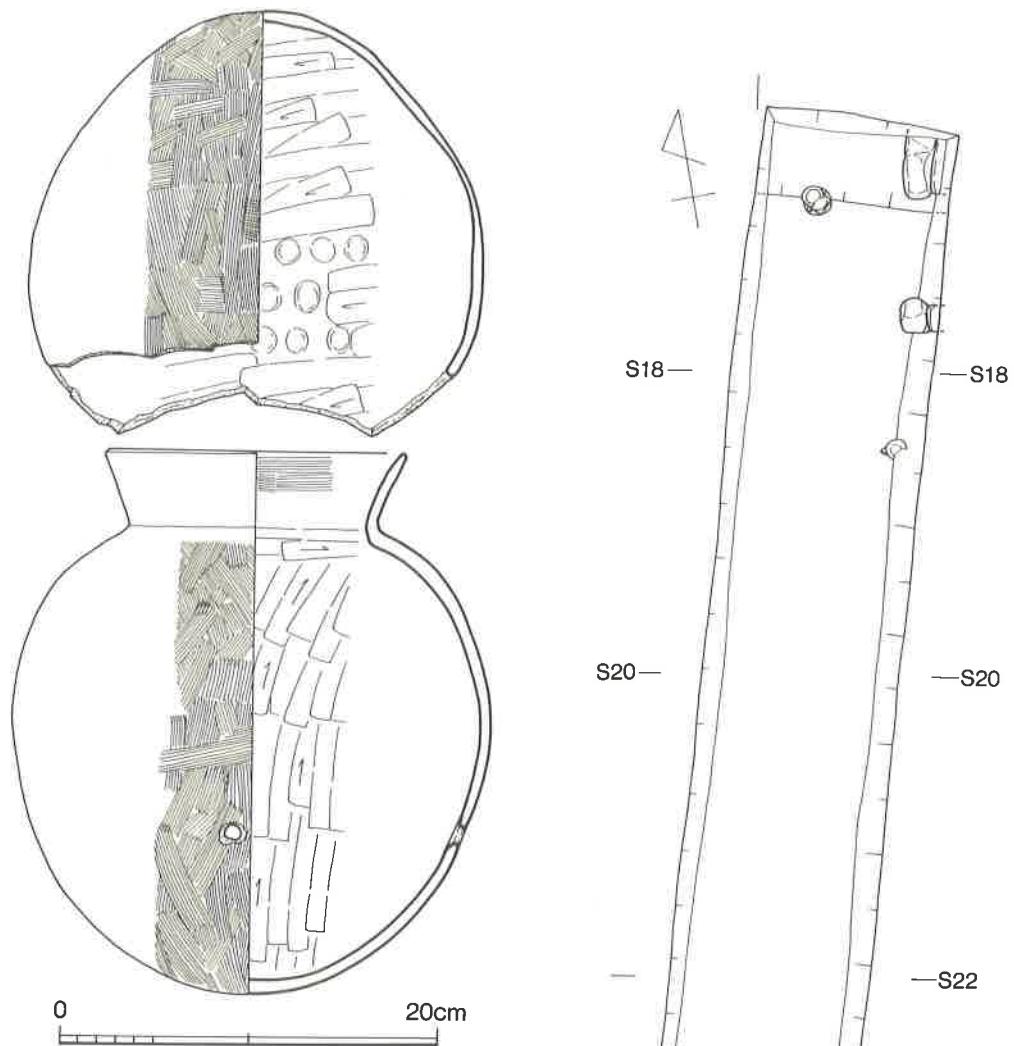
下甕に用いられた甕は器高28.6cm、口径15.5cm、胴部最大径は25.1cmを測る。胴部は縦・横のハケ目、口縁から頸はヨコナデ、内面の口頸部は横方向ハケ目の後ヨコナデ、胴部内面はヘラ削り。胴部のやや下位に外から内へ穿孔した1cm程の穴があるが、埋葬時の下位ではなく真横に穿孔していた。胴部中央より下位8cm程の部分には煤の付着がみられ日常容器を転用したことがわかる。暗黄褐色を呈し、胎土には石英および微細な金雲母片を含み、焼成は硬く良好。

上甕は胴部上半から上を打欠いている。胴部最大径は23.9cm。外面はハケ目、内面は横方向のヘラ削りであるが、胴部内面のやや上位にはタタキアテ具痕様の凹みが部分的に残っている。内面は淡茶褐色、外の地色は暗黄褐色でその上から黒塗りを加えている。胎土には石英および金雲母片を含み、焼成は硬く良好。

これらの土師器は須恵器出現前後のものと思われ、5世紀前半頃に比定できよう。

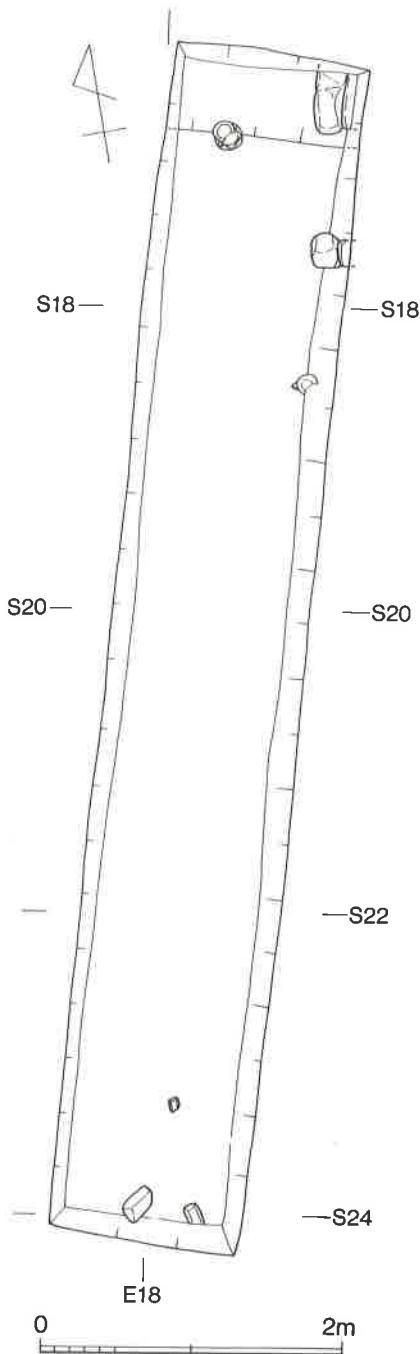
3. II-02 b トレンチ

1) II-02 b トレンチ(第11図、図版3 a)

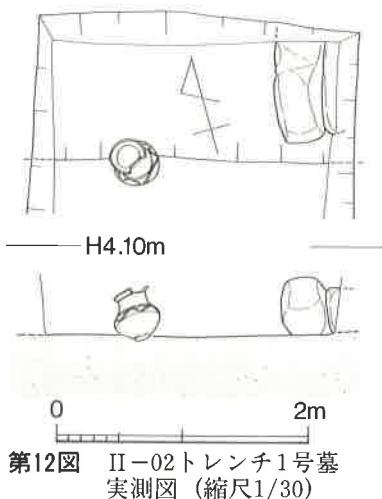


第10図 II-02a トレンチ 3号墓葬棺実測図（縮尺1/4）

ため、II-03と道路をはさんで南側の畑で作物の植えていない部分を選び、南北方向に8m、幅1.4mのトレンチを設定し墓域の東南端をつかむことを目的とした。II-02aと同一の畑であるところからII-02bトレンチとした。II-02bトレンチ付近は10~15cmのマサ土の客土があり、旧表土で標高4.55cm程である。その下に10~15cm程の耕作土（1層）があり、その下に遺物をほとんど含



第11図 II-02b トレンチ（縮尺1/50）

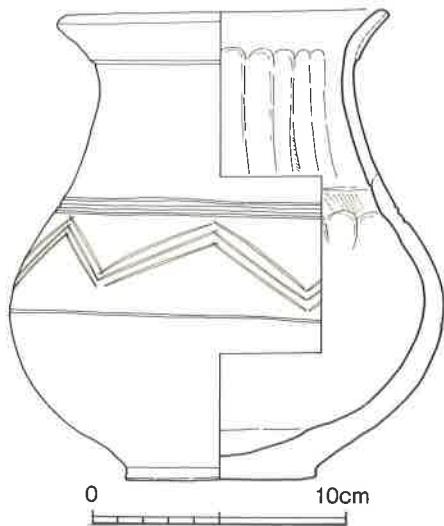


第12図 II-02トレンチ1号墓
実測図 (縮尺1/30)

まない黄色砂層（2層）が25cm程あり、その下に遺物包含層である第3層が40cm程あり、その下が遺構面となる。他のトレンチでも若干の異同はあっても基本的には同じ状況である。このトレンチの北端で表土下60cmで花崗岩のやや大き目の石が東北隅に露われ、75cmのところで土壙墓の線が認められた。土壙墓の南壁に接して副葬小壺1個が検出された。それより南側では遺構は検出されなかった。また遺物包含層である第3層においても南に行くにしたがい遺物の量は少なく、又風成作用による波文が明瞭であった。したがってこの部分は砂丘の頂部にあたり、これより南側つまり、海側には墳墓はつくらなかったものと考えられる。

2) 1号墓 (第12図、図版3 b)

トレンチにその一部がかかったのみで全容はわからない。東西方向に長軸をもつ土壙墓と考えられる。支石もしくは墓標と考えられる石は見えている部分で40cm、高さ25cm程でかなり大きい。副葬小壺は南壁上に置かれており、口縁の一部を打欠いている。



第13図 II-02bトレンチ1号墓副葬小壺
実測図 (縮尺1/3)

3) 副葬小壺 (第13図、卷頭図版7 b)

器高18.5cm、口径12.3cm、胴部最大径17.1cm、底径7.5cmを測る。口縁は外反し、口縁外側には粘土帯を貼付し肥厚部をつくる。口縁下は段、肩は3条の沈線を左廻りに、胴部中央には1条の沈線を左廻りに巡らし、その間に同じく左廻りで3条の複線山形文を施す。底部はいわゆる円盤貼付底である。外面および口縁内面は横方向ミガキ、外底は擦過の後ナデを加える。胴部内面はナデ、肩部内面は幅15mm程度の指圧痕又は木口痕様の痕跡がみられるが完形品なので詳細な観察ができずいずれかきめ難い。頸部内面はハケ目の後指圧痕がみられる。茶褐色を呈し、石英粒を微量に含み、

焼成は硬く良好。板付 I 式に比定できる。

4) 包含層出土の土器（第14図）

1 は 3 層出土の甕棺口縁片である。外反する口縁上端に粘土帯を貼付し、口縁外側下端にヘラによる刻目を施す。外面に粗い横方向のミガキが認められる他は風化がいちぢるしい。淡黄褐色を呈し、砂粒をやや多く含み、焼成は硬く良好。橋口の分類による K I 期の甕棺である。

2 は第11図に図示された高坏で第 3 層にあり、副葬小壺よりはやや高いところで出土した。器高 11.2cm、口径 12.4cm、脚裾径 10.2cm を測る。内面は風化し調整法は不明。坏部外面はナデ、脚柱部はヘラ切り、脚裾は内外ともにヨコナデ、脚柱内面は回転ヘラナデを施す。明茶色で、精選粘土を用い、焼成はやや硬めで良。古墳時代後期に属する。

3 は須恵器坏蓋で小さなつまみがつく。径 9.7cm、器高 3.2cm を測る。灰黒色を呈し、砂粒を少量含み、焼成は良好。7 世紀前半頃のものといわれている。

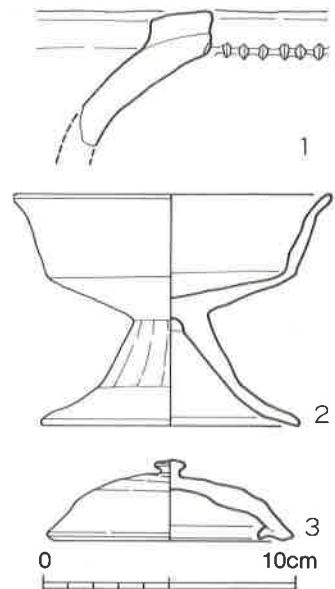
以上 3 点を図示したが包含層は 2・3 および奈良時代頃のものを主体としている。

4. II-03・05 トレンチ

1) II-03・05 トレンチ（第15図、図版 4 a）

弥生前期前半の墓域の東端をつかむ目的で、第 1 次調査第 1 地点東南隅に隣接する畠地に、道路の北側に接して東西 10.5m、幅 2 m のトレンチを設け II-03 トレンチとした。道路の彎曲に合せて II-03 より 0.6m はなれた所を起点としてさらに東西に長さ 18m、幅 2 m のトレンチを設定し、新たな墓域をさがすのを目的とした。これを II-05 トレンチとした。II-03 の東端、II-05 の西端で同一支石墓の上石を確認したので、その全容を把握すべく畦として残した部分も発掘し結果的には同一のトレンチとなつた（第 3 図）。

II-03 トレンチでは西南隅に玄武岩の板石の一部が確認された。おそらく支石墓の上石であろうと考えられるので 1 号墓とした。又西端には大きな攪乱穴もあったが掘り上げなかつた。第 1 次調査の 2 号墓と同様支石墓上石をたたき割り埋めたものであろうか。

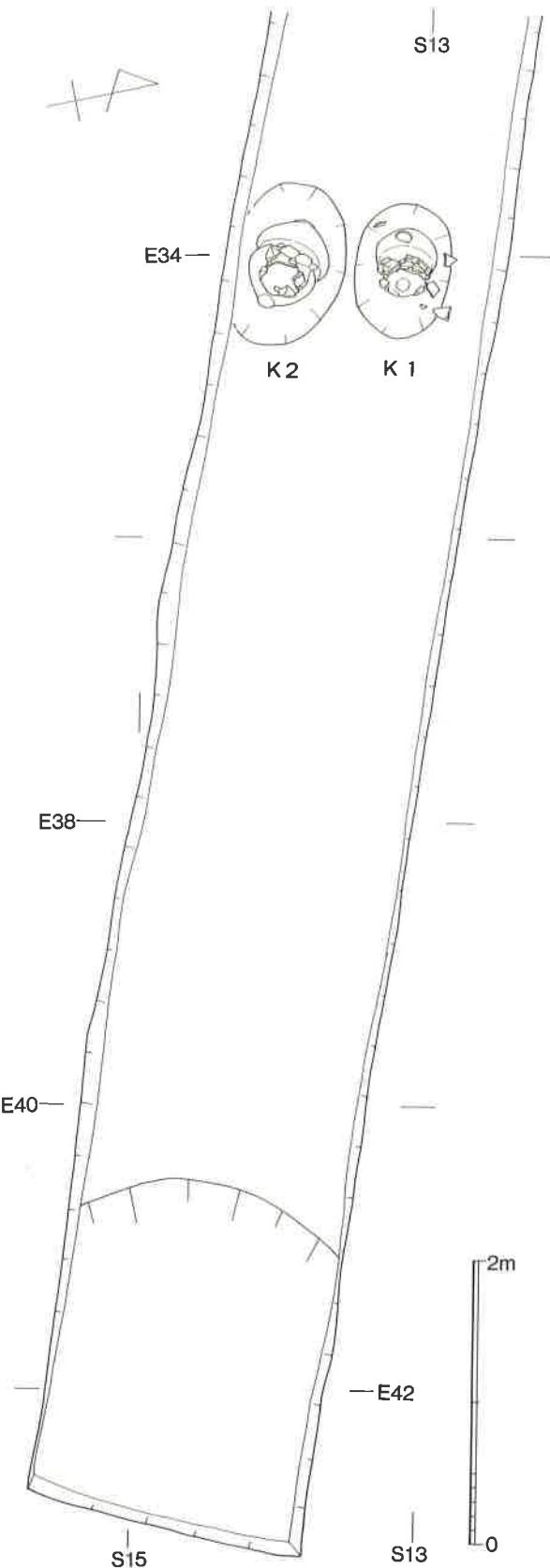


第14図 II-02b トレンチ出土
土器実測図（縮尺1/3）

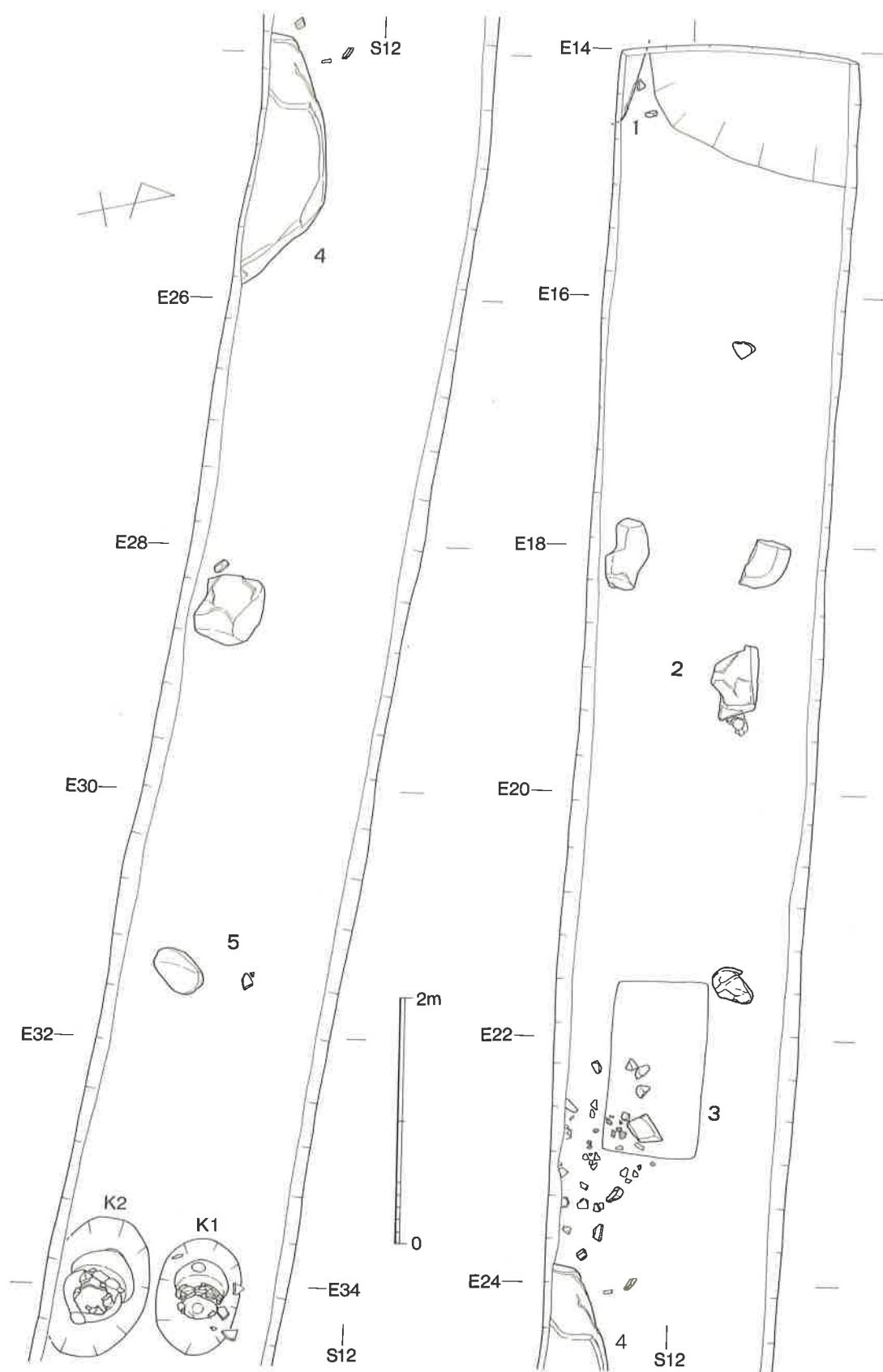
西端から5m程のところで2号墓を確認した。第15図では、50~60cm大の石3個がみられるが西南側の石は北側2個の石の頂部より、底面がさらに15cm程高い位置にあり2号墓とは無関係である。2号墓はさらに北側に同様の石2個があり支石となる可能性が高い。東側の石に接して底部を上にした副葬小壺(第19図1)が出土した。

西端から8.5m程のところできれいな白砂のつまつた土壙墓を確認し3号墓とした。3号墓は長145cm、幅76cmを測り、西北隅に35cm大の、又土壙墓の東に25cm大の花崗岩の礫2個がみられた。石の配置からすれば墓標と思われる。3号墓の東南部から4号墓付近にかけてK I期の甕棺片(第19図5)が散乱し、これらに混って板付I式の小壺片が東側の花崗岩礫付近を中心にして散在した。この小壺が副葬品であり、K I c式の甕棺はこの土壙墓には関係ないものである。表層出土の壺底部のやや大きな破片がこの副葬小壺と接合した。いずれかの時点で土壙墓の上面が攪乱を受け、その際副葬小壺、甕棺片が混在したものであろう。

トレーナー西端から11m程のところで支石墓上石があり4号墓とした。この石は青味を帯びた糸島閃緑花崗岩でその大半は未掘部分にある。発掘して露出した部分の長さは205cmで



第15図 II-03・05トレーナー1 (縮尺1/50)



第15図 II-03・05トレンチ2 (縮尺1/50)

あるが、全長270～280cm、幅200cm程の大きなものとなりそうで一部は道路下にあり、現段階ではその全容は発掘できない。

4号墓の上石から東へ3.5m程のところに60cm大のかなり大きな花崗岩の礫があったが、これは遺構面よりやや浮いた状態なので番号は付さなかった。

4号墓の上石より東へ6.5m程のところに45cm大の花崗岩礫があり、付近に夜臼式の丹塗り磨研大壺の口縁と、同じく夜臼式の小壺の口縁片があったのでこれを5号とした。墓壙等の検出はしていない。

4号墓上石から東へ9.5m付近で甕棺2基を検出した。これは当初から甕棺と判明していたので北側のものを1号甕棺墓、南側のものを2号甕棺墓とした。

さらにトレーナーの東端には大きな攪乱穴があったが、層位的には表土下より掘りこまれており、近年のものであろうと判断された。

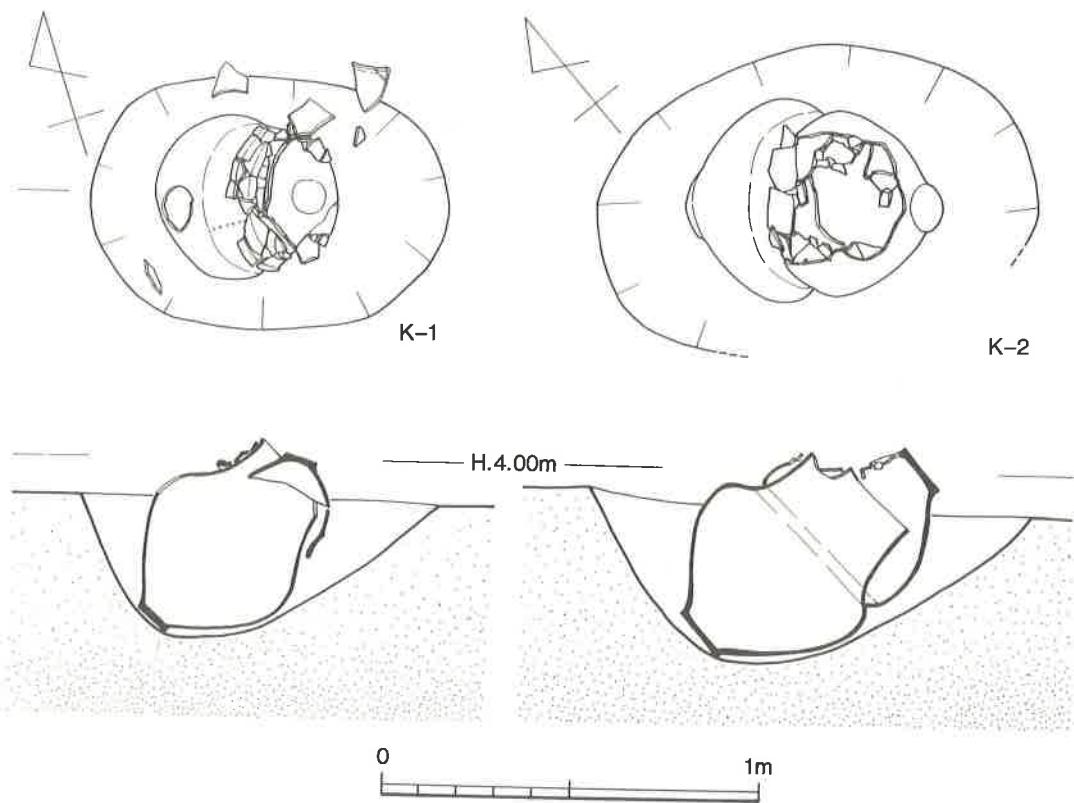
2) 副葬小壺他 (第19図1～4)

1は2号墓の副葬小壺である。胴部上半から上を欠いている。底径は7.2cm。外面は風化のため調整法は不明、内面は擦過の後ナデ。内面は茶色、外面は底部付近に黒色部分が残るので黒色磨研もしくは黒塗りであったと思われる。胎土は器面風化のため砂粒が多く露われている。焼成はやや軟質で不良。

2は3号墓の副葬小壺で一部表層より出土の破片とも接合した。胴下半部の他、各部の破片があるが肩部の文様帶、底部付近のみしか図示し得ない。文様は複線山形文、底部は円盤貼付である。底部近くに一部ハケ目が残る他はミガキを施している。全体に黒っぽいが丹塗りの痕跡が認められ暗紅色をなす部分がある。黒色磨研の上から丹塗りを加えたものかと思われる。胎土には少量の砂粒を含み焼成は良好。板付I式に属する。

3は5号墓とした石の付近から出土した小壺で4の大壺とセットになるものと思われる。復原口径は10.5cm。口縁下には1条の沈線をめぐらす。外面から口縁内面は丁寧な横方向ミガキ、頸部内面はナデ。内面は黒色、外面は茶褐色をなすが、本来黒塗りであったと思われる。胎土には精選粘土を用い、焼成は硬く良好。夜臼式に属する。

4は5号墓とした石の付近からと、1号甕棺墓壙外から出土したものが接合され、又1号甕棺墓壙内にも同一固体の胴部片と思われるものが数片あるが直接つながらなかった。以上のことは1号甕棺を埋葬した際に5号墓としたものは破壊を受けたか、既に破壊を受けていたということになろう。復原口径は23.0cmを測る。口縁内外は横方向ミガキ、頸部は縦および斜方向のミガキ、頸部内面は擦過であるが下位にタタキアテ具痕様の丸い凹みがみられる。内面は赤褐色、丹は暗赤色を呈し、胎土には細粒の砂をわずかに含み、焼成は硬く良好。夜臼式に属する。



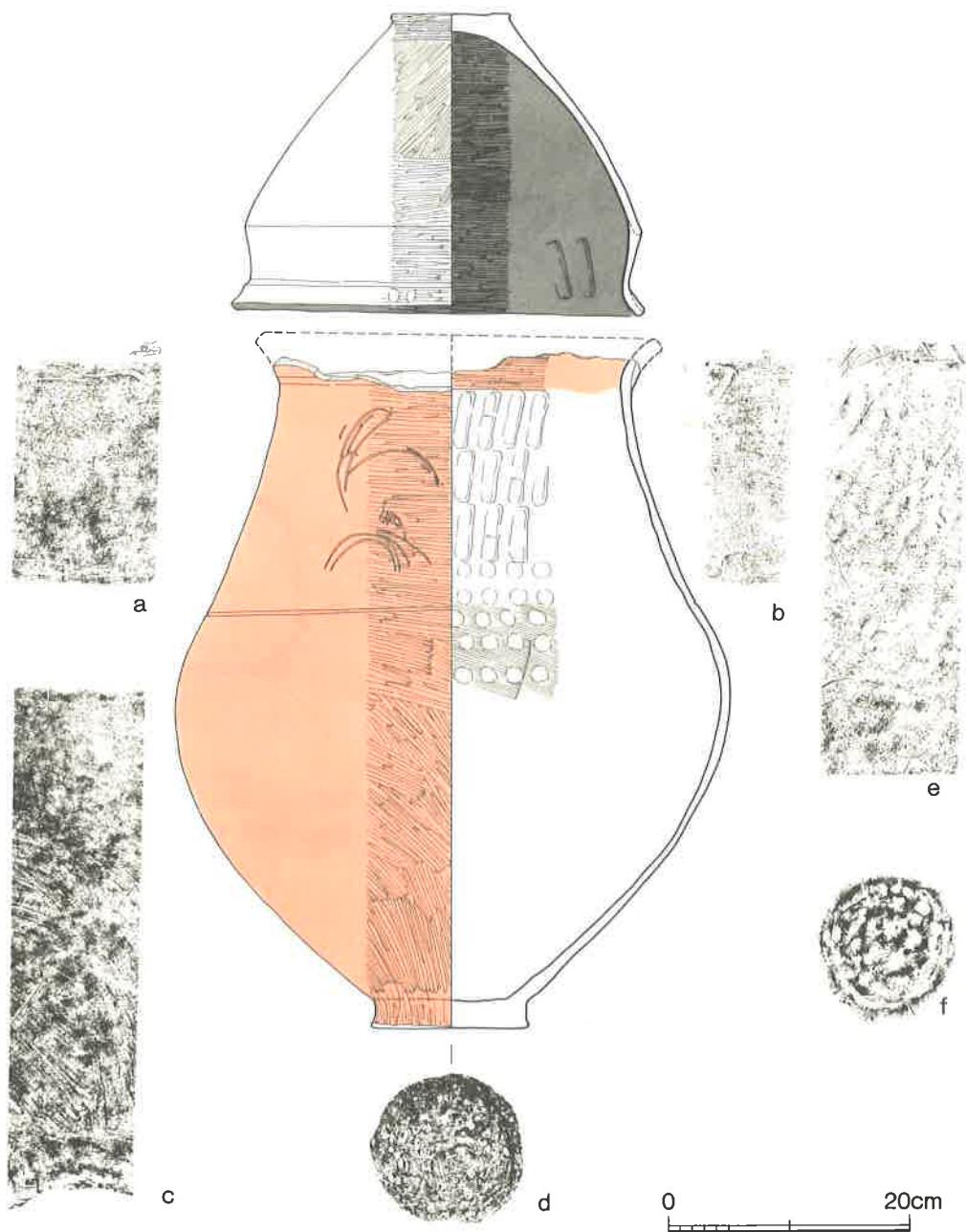
第16図 II-05 トレンチ 1・2号 蔕棺墓実測図 (縮尺1/20)

3) 1号 蔕棺墓 (第16図 図版 4 b・c)

主軸をN-72°-Wにとる。95cm×66cmの長円形の墓壙に、下蓋として丹塗り磨研の大壺を傾斜角47°で置き、上蓋として深鉢を使用している。棺に用いられた土器はいずれも板付I式のものであるが、弥生早期の葬棺が墓壙底に石を置き葬棺を固定するような作業を行なったのに比し、既に石を置かないようになっている。下蓋内より乳歯10本および岩様部錐体が出土した。6ヶ月～7ヶ月の乳児と鑑定されている。

4) 1号 蔕棺 (第17図、卷頭図版 7 c・d)

上蓋は深鉢である。器高25.2cm、口径33.2cm、肩部径32.8cm、底部径9.9cm。口縁は外反し、外側には粘土帶を貼付し肥厚部をつける。底部はわずかに上げ底ぎみ。内外ともにミガキであ



第17図 II-05トレンチ1号甕棺実測図（縮尺1/6）a～dは外面 e・fは内面の拓影
るが、底部にハケ目工具の起点痕、頸部内面に一見指圧痕様を呈するハケ目工具痕がみられ、
ハケ目を施した後ミガキを加えたことがわかる。口縁部外側の肥厚部には部分的に指圧痕が残
る。内面および口縁端までは黒色磨研、外面は淡黄褐色を呈する。胎土には石英粒をわずかに

含み、焼成は硬く良好。板付I式に属する肩で屈曲する深鉢で、晩期以来のものであるが、橋口の分類による晩期V・VI式頃から急速に減少し、弥生早期を経て板付I式頃まで少量ながら残る器種である。

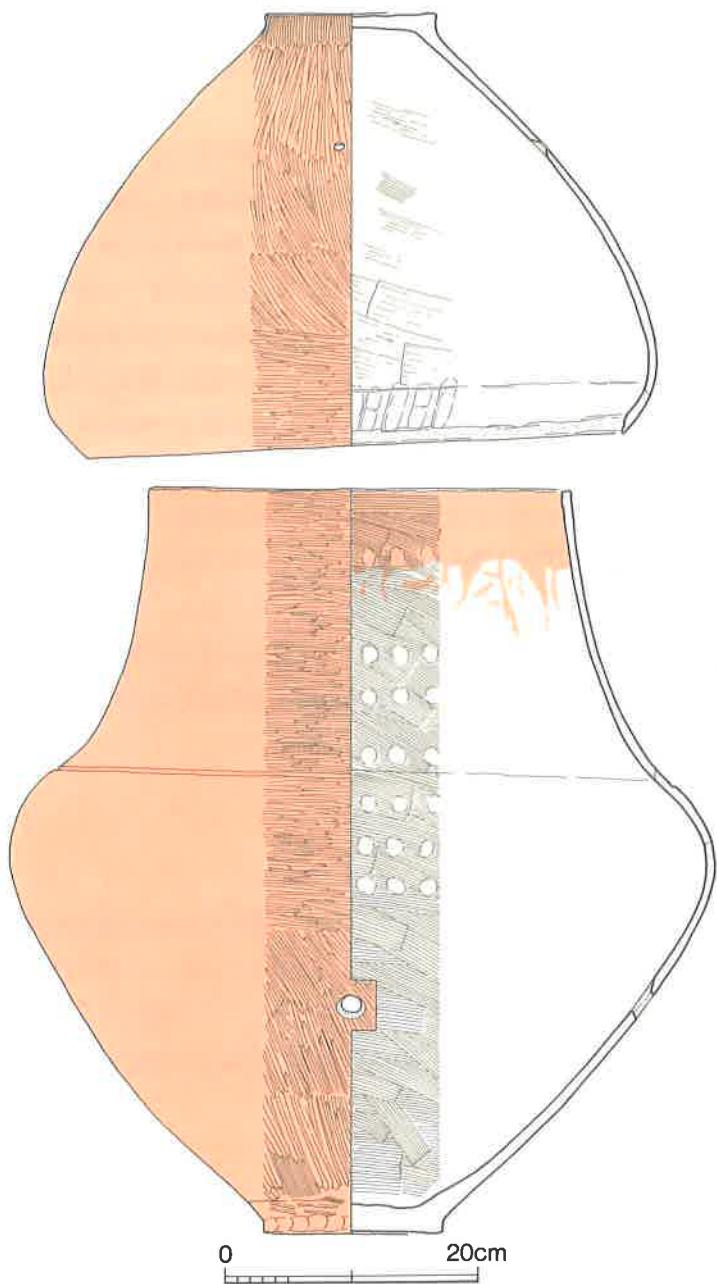
下甕は復原器高57.5cm程の丹塗り磨研大形壺の口縁を打欠いたものを用いている。現存高55.8cm、最小口縁内径27.3cm、肩部径40.6cm、胴部最大径45.8cm、底径13cmを測る。口縁は外反し、外側には粘土帯を貼付し肥厚部をつくり、口縁下には段を形成する。頸から肩へはなだらかに移行し、肩には1条の沈線をめぐらす。胴部最大径はやや上位にあるが肩の張りは弱く、胴はやや長胴の趣がある。底部近くは縦方向のナデ風擦過、他はミガキで底部近くは縦方向、胴部最大径付近までは斜方向、肩から上および口縁内面は横方向のミガキ。外底は擦過。内底はナデであるが丸い棒木口痕様の痕跡が残る。内面の胴部下半はハケ目の後それを丁寧にナデ消す。胴部上半および肩部内面は横方向のハケ目を施すが、棒木口痕様の12~15mm前後の丸い凹みがハケ目下に5段にわたってみられる。タタキアテ具痕と思われる。頸部内面はナデであるが、一見指圧痕様のハケ目工具痕がみられハケ目の後ナデを加えたことがわかる。頸部には一方に草葉文らしき線刻があり、ほぼその裏面には3列の不連続縦沈線がみられる。地色は暗黄褐色、丹は淡赤（褐）色を呈する。胎土には石英粒をわずかに含み、焼成は硬く良好。板付I式に属するが、肩の張りが弱くやや長胴をなす点、又3列の不連続縦沈線等板付II式へと連なる要素があり、板付I式としては新しい要素をもつものと考える。

5) 2号甕棺墓（第16図、巻頭図版3 b. 図版4 d）

主軸をN-51°-Wにとる。115cm×(80)cm程の長円形の墓壙を掘り、傾斜角で43°口縁を打欠いた大壺を下甕として据え、肩から上を打欠いた大壺を上甕としてかぶせている。上甕には底部近くの南側に、下甕には中央よりやや横にずれた部分に穿孔がみられた。この甕棺もやはり墓壙底には石を置いていない。棺内からは乳歯の破片若干がみられた。被葬者は乳児の可能性が大きいとの鑑定であった。

6) 2号甕棺（第18図、巻頭図版7 e・f）

上甕は肩から上を打欠いた丹塗り磨研の大壺を用いている。現存高35.3cm、胴部最大径48.7cm、底径13.7cmを測る。外底は擦過、底部にはハケ目が残る。胴部下半は縦および斜方向のミガキ、胴部上半は横方向ミガキ。内底は擦過の後ナデを加えているが棒木口痕様の丸い凹面が消えずに残る。胴部内面は擦過、胴部上半には一見指圧痕様の擦過工具の起点痕がみられる。内面は暗黄褐色、丹は暗赤色を呈する。胎土には石英粒をやや多く含み、焼成は硬く良好。底部



第18図 II-05トレンチ2号甕棺実測図（縮尺1/6）

近くに外から内へと穿孔した径8mm程の小孔がある。

下甕は口縁を打欠いた丹塗り磨研の大甕を用いている。現存高59.3cm、口縁内径32.3cm、肩部径49.2cm、胴部最大径55.8cm、底径14.2cmを測る。肩には1条の沈線をめぐらし、肩の張りはやや強く、胴部最大径は上位にある。外底は擦過の後ナデ、底部近くは縦方向の擦過の後ナデを加えるがタタキ痕と思われる痕跡が認められ、タタキ→擦過→ナデの順に施されたことがわかる。胴部下半は縦および斜方向、胴部上半から口縁内面は横方向のミガキを施すが、底部近く、頸部等に部分的にハケ目がみられ、ハケ目の後ミガキを加えたことがわかる。内底はナデているが棒木口痕様の凹面がみとめられる。内面はハケ目を施すが頸および肩には棒木口痕様の凹面が認められる。タタキ

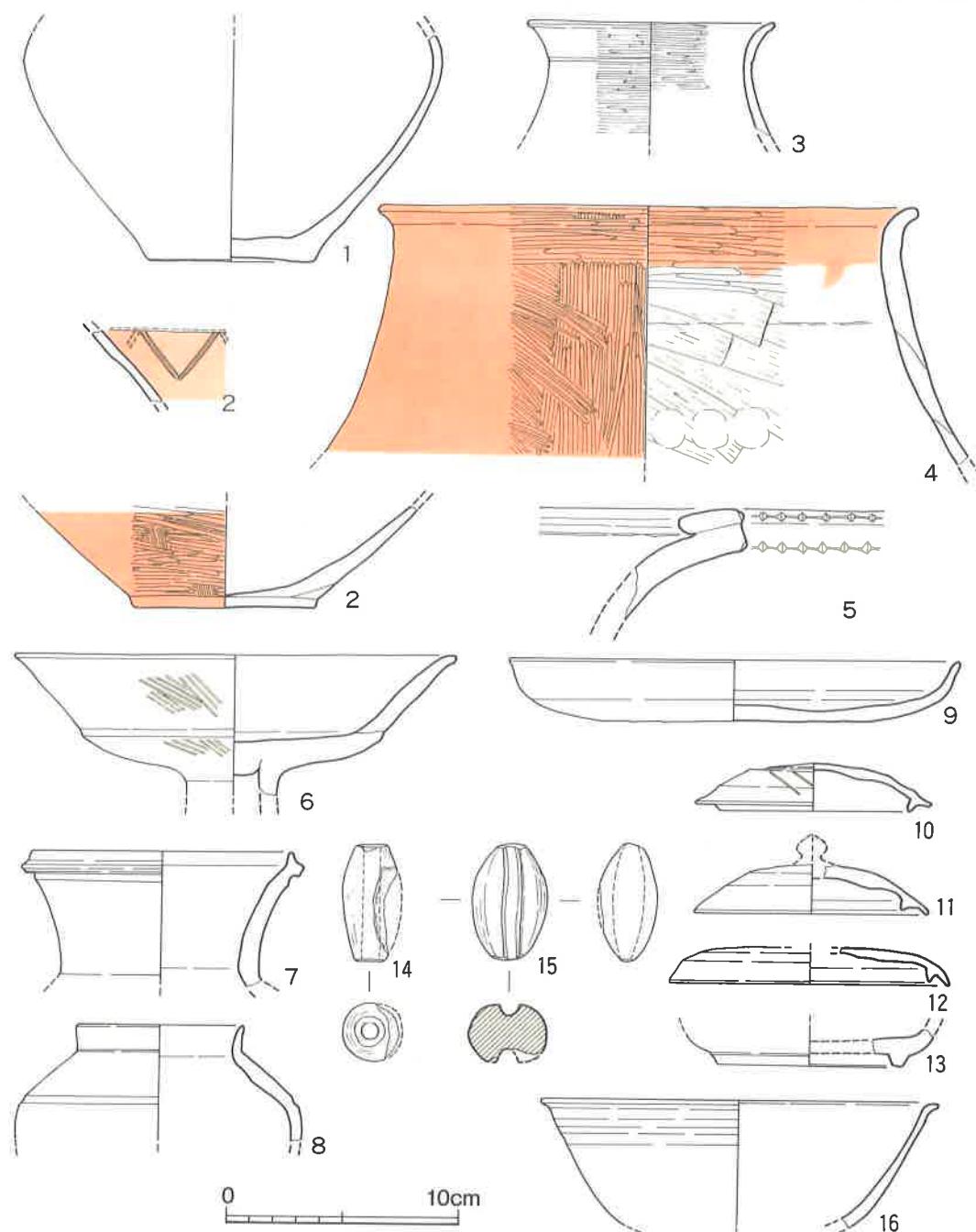
アテ具痕と思われる。地色は淡茶褐色、丹は暗赤色を呈する。胎土には石英粒を微量に含み、焼成は硬く良好。胴下半に外から内へと穿孔した径20mm前後の小孔がみられる。

上下いずれも板付I式に属するが、肩の張り等からすると1号甕棺よりも古い要素が認めら

れる。

7) II-03・05トレンチ出土のその他の遺物(第19図5~16, 第43図4・5)

5は3号墓周辺に散乱していたものである。外反する口縁の上端に粘土帯を貼付し、口縁外



第19図 II-03・05トレンチ出土土器実測図 (縮尺1/3)

側の上下端にヘラによる刻目を施す。口縁内外はヨコナデ、他はナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成はやや軟にして不良。橋口の編年によるK I期の甕棺片である。

6は高坏部である。口径は19.0cm。口縁内外、坏反転部はヨコナデ、他はハケ目の後ナデ、内面は風化のため調整法は不明。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含み、焼成は硬く良好。この高坏はII-2aトレンチ3号墓甕棺等と同様須恵器出現前後頃のもので5世紀前半頃に位置付けられる。

7は須恵器壺で復原口径11.2cm。全体にきたない釉がかかる。内面は小豆色、外面は灰色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。

8は須恵器壺である。内面および外面の肩および胴下半はヨコナデ。灰色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。

9は須恵器生焼けの皿である。内底は風化のため調整法は不明。口縁内側は回転ヘラナデ、外面の口縁から体部はナデ、外底には回転ヘラ削りが認められる。淡黄褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は軟質で不良。

10・11・12は須恵器坏蓋である。10は内外にヘラ記号をもつ。11はつまみの痕跡がある。

13は須恵器高台付坏である。灰色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。

7～12は7世紀前半頃、13は奈良時代のもので、これらの土器が包含層の主体をなしている。

14は土錘で暗褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は軟質で不良。19.7gを測る。

15も土錘で全体につくりが良い。黄白色を呈し、胎土には赤色粒子を含む。焼成はやや軟質ではあるが良好。32.5gを測る。

16は青磁碗である。口径は17cm。釉はくすんだ緑色、胎土は灰白色を呈し、精選粘土を使用し、焼成は良好。平安時代のものと考えられる。

以上5～16はすべてII-03トレンチ3層の出土である。

第43図4は3号墓周辺に散乱した甕棺片等とともに出土した滑石製白玉片で、灰白色を呈する。外径5.4mm、厚さ2.2mmを測る。

5はII-05トレンチ3層より出土した滑石製白玉で白色を呈する。外径7.1mm、孔径2.8mm、高さ3.3～2.5mmを測る。

5. II-04トレンチ

1) II-04トレンチ(第20図、図版5a)

弥生早期の墓域の東端をつかむため本来は東西方向にトレンチを設定したかったが作物等諸々の条件で畦道の東側に接して南北に長さ8m、幅2mのトレンチを設けた(第3図)。本来の表土の上にゴミ・堆肥まじりの黒色土層が35cm程堆積していた。旧表土下60cm程で遺構面に達す

るが南から北へと次第に低くなり、北半分では遺構は確認できず。墓域の東北の一端は確認し得たものと考える。トレンチ南側の西壁にかなり大きな青味がかった糸島閃緑花崗岩の立石があり、本来立石なのか支石墓上石が取りのぞかれたものか確かめたかったが畦道にかかっていたのでトレンチを拡幅できなかった。層位的にみると旧表土より上に一部が露出し、立石のまわりは2層・3層をたちきるような線があるが、これが石のまわりに生ずるしみなのか、あるいは除去した石を埋めた時の掘り方の線なのか判断しかねる。この立石の南側には糸島閃緑花崗岩の礫が、立石の北側には30~40cm大の花崗岩礫3個があり、北側の石3個は配置の状況から支石と考えられる。

6. II-06トレンチ

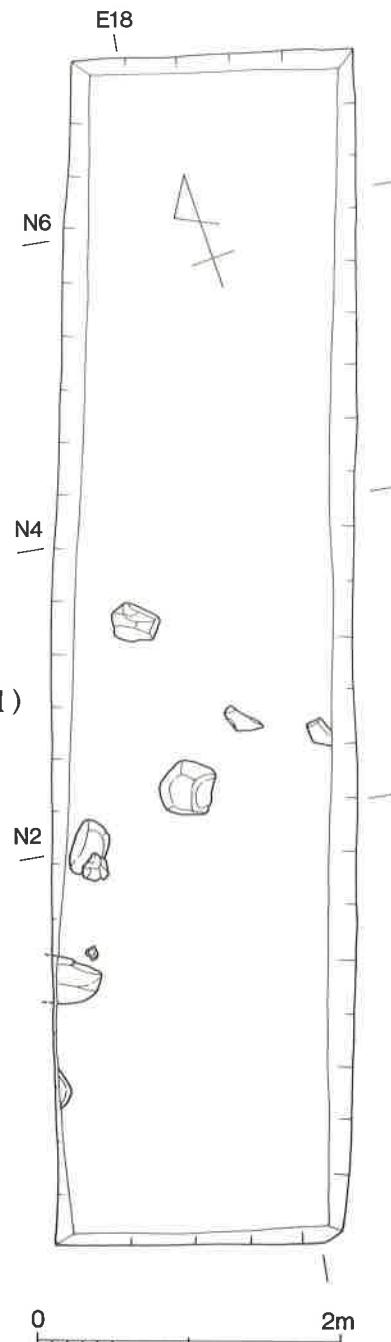
1) II-06トレンチ（第21図、図版5 b・c・d）

新たな墓域の有無を確認するために第1次調査第1地点の東北側、II-05トレンチの北側の畠に東西に長さ7m、幅2mのトレンチを設定して発掘した（第3図）。結果は3層から掘り込む東西に走る溝の北壁を確認した。3層は今まで述べてきたように遺物包含層であり、古墳時代後期の遺物を主体としている。発掘した最下層から弥生土器も出はじめたが、標高3mぐらいまで掘り下げて墳墓群を確認できなかったので、この付近は墓域外であると判断した。溝の時期は古墳時代後期以後のものである。

2) 出土土器（第22図）

すべて3層よりの出土である。

1は蓋形の弥生土器である。内面は風化のため調整法



第20図 II-04トレンチ（縮尺1/50）

は不明、外面は粗いハケ目を施す。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み焼成はやや不良。外面には煤が付着する。

2・3は須恵器坏蓋として図示したが、身になるかもしれない。径は両者ともに10.8cm、口径9cmを測る。

4は須恵器坏身で口径10.8cm、蓋受け部の径13cmを測る。灰黒色を呈するが一部に灰黄色の自然釉がかかる。微量の砂粒を含み、焼成は良好。

2・3・4とともに6世紀末頃に位置付けられている。

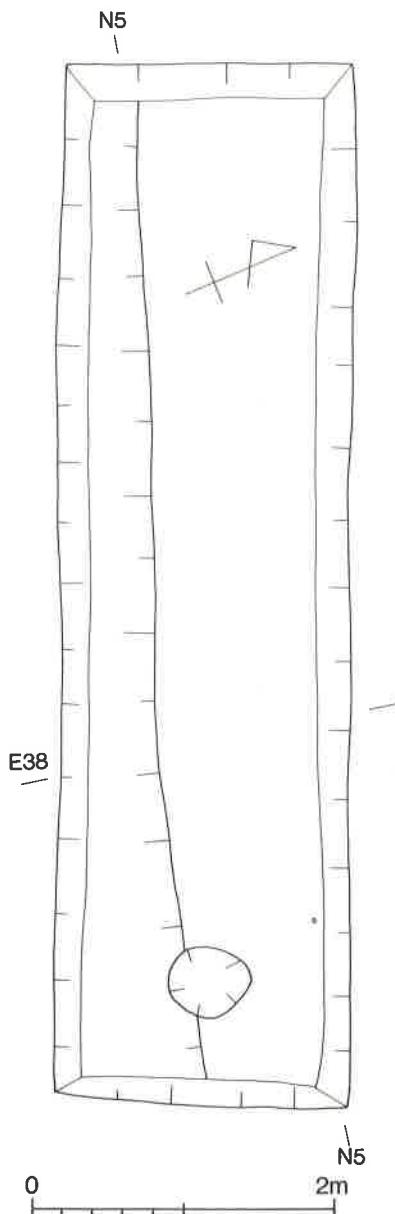
3) その他の遺物（第43図2）

3層の地表下75cmのところで銅地金張の耳環が出土した。外径17.6mm×16.4mm、内径9.1mm、断面径4.6~6.0mmを測る。

7. II-07 トレンチ

1) II-07 トレンチ（第23図、図版5e）

新たな墓域の有無と、墓域の時期的変遷を把握するためにII-05トレンチの東端からさらに東南へ20m程の畠地に道路の北側に接して東西に長さ4m、幅2mのトレンチを設定し発掘した（第3図）。発掘の結果トレンチ東南隅に厚さ10cm、幅50cm、現状での高さ35cmの立石があつたが、周囲で遺構の検出はしていない。トレンチ北壁のやや東寄りで幅65cmの土壙墓を検出した。その西側壁付近には大形壺片が散乱していた。

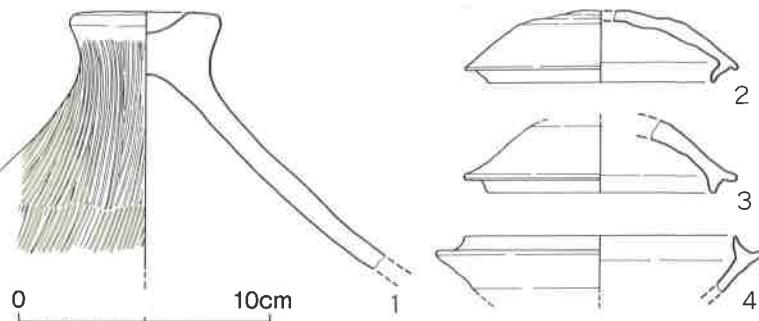


第21図 II-06 トレンチ（縮尺1/50）

2) 出土土器（第24図）

1・2・3は土壙墓の周辺に散乱していた土器である。1は丹塗り磨研の大壺口縁片で口径55cm程に復原できる。外反する口縁端の外側に粘土帯を貼付し肥厚部をつくり、口縁は段を形

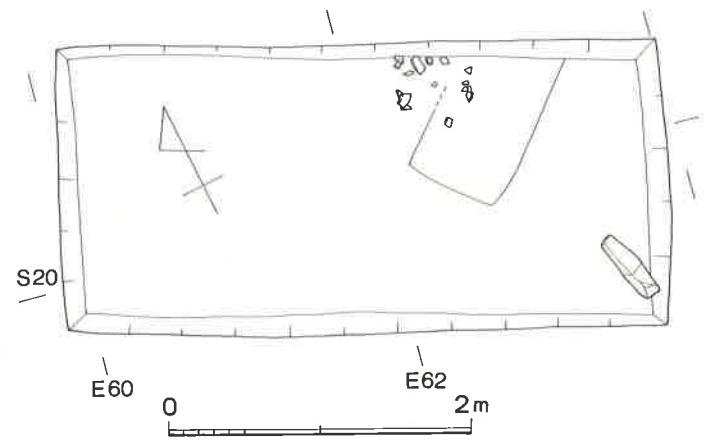
成し古い要素
を残している。
内外ともに横
方向ミガキ、
丹は暗赤色で
外面にはさら
に黒褐色の黒
塗りを加えて



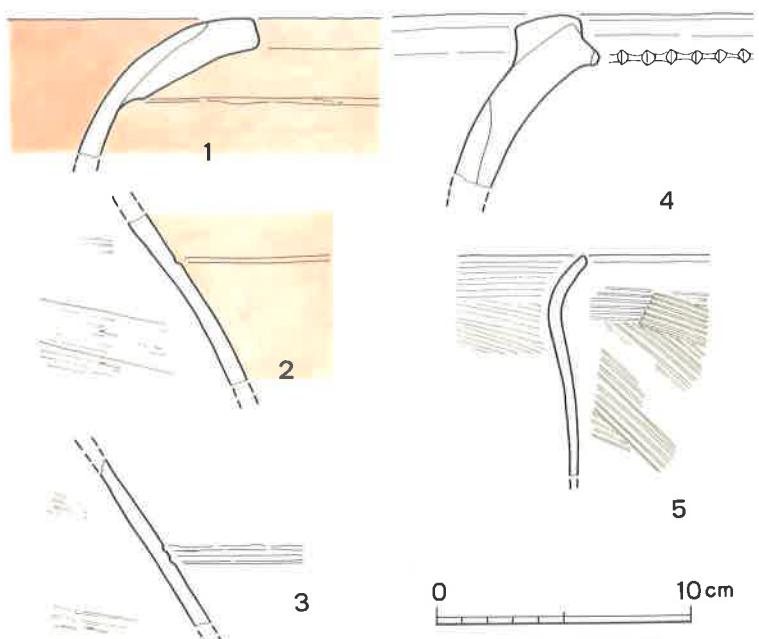
第22図 II-06トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）

いる。2は肩の部分で1条の沈線を
有する。内面は擦過の後ナデ、外面
は横方向ミガキ。内面は淡赤褐色、
丹は暗赤色、さらにその上に黒褐色
の黒塗りを加えており1と同一個体
となるのは明らかである。沈線1条
ならびに手法の同一のものが他に2
片ある。胎土には微量の砂粒を含み、
焼成は硬く良好。

3は肩の部分で沈線が2条ある。
外面はミガキを加えているが上の沈
線はミガキの前に施されミガ
キでややつぶれている。下の
線はミガキの後に施されてい
る。内面は擦過であるが、沈
線部分つまり肩のところはナ
デを加えている。淡茶色を呈
し、胎土には微量の砂粒を含
み、焼成は硬く良好。同一
の色調・手法をなす破片の中
に内から外へ穿孔を施したもの
があり、1・2は上甕の破片、
3つまり沈線2条の壺は下甕
となる可能性が強い。したが
ってこれらの土器は土壙墓に



第23図 II-07トレンチ（縮尺1/50）



第24図 II-07トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）

伴う副葬品ではなく、土壙墓を掘る際か又はいずれかの機会に攪乱を受けて破碎された甕棺と考えられる。古い要素が残っているとはいえ板付II（古）式に属するものと考えられる。口径55cmという大形品なので既に甕棺専用としてつくられたものと考えられ、橋口の分類によるK I a式の甕棺に比定してよからう。

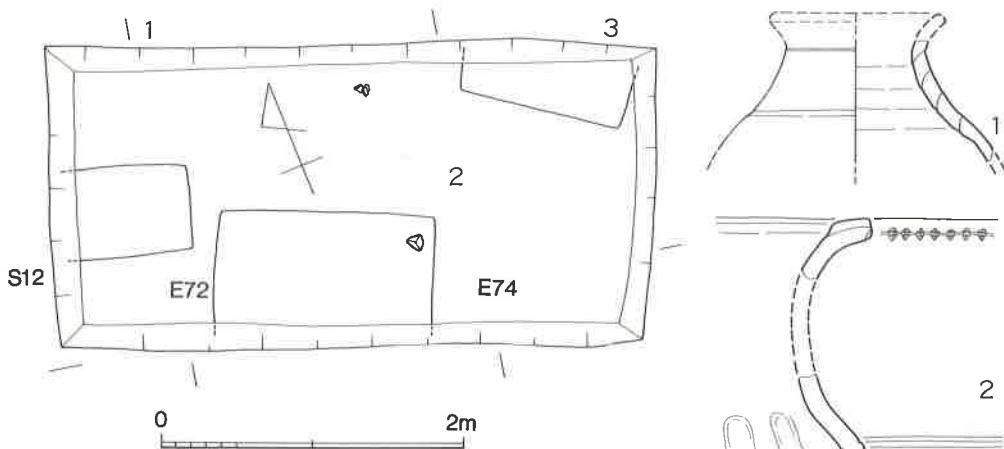
4は甕棺の口縁片である。外反する口縁上端に粘土帯を貼付し、口縁外側の下端にヘラによる刻目を施す。内外ともにヨコナデ。淡茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。橋口の分類によるK I期の甕棺に比定される。3層からの出土である。

5は甕の破片である。胴部内面はナデ、口縁内面および外面は粗いハケ目。黒褐色を呈し、胎土にはやや多めに砂粒を含み、焼成は硬く良好。板付II式の新しい段階のものであろう。3層からの出土である。

8. II-08トレンチ

1) II-08トレンチ（第25図、図版5f）

II-07トレンチの東北側約15mの地点に、墓域の有無および墓域の時期的変遷を把握する目的をもって、東西に長さ4m、幅2mのトレンチを設定し発掘した（第3図）。他の地点に比し40~50cm程客土されている模様で、3層目に旧表土と思われる15cm程の黒色砂層がある。それから40~45cm程下げる、つまり現表土から80~90cm程で遺構面に達する。東西に長軸をとる土壙墓3基を確認した。3号墓の西側には壺2個体分があったが、小壺は副葬品の可能性が強い



第25図 II-08トレンチ（縮尺1/50）

第26図 II-08トレンチ出土土器
実測図（縮尺1/3）

が、どの土壙墓に伴うかはわからない。いずれにしてもこの付近の墳墓の時期を判断する資料といえる。

2) 出土土器（第26図）

1は小壺の破片で口径6.5cm程のものである。口縁下には沈線状に段を、肩には段をつくる。内面には輪づみの痕跡が明瞭に残る。胴部内面は擦過、頸部内面はナデ、口縁内面から外面は横方向ミガキ。内面は黄白色、外面は淡黄色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。古い要素をもち板付I式、下げても板付II式の古い段階のものであろう。

2は外反する口縁上端に粘土帯を貼付し、口縁外側の下端にはハケ目工具で施された刻目をもつ。頸部は強く内彎し、肩は張り2条の沈線をめぐらす。肩部内面はナデ、口縁内面および外面は横方向ミガキ。淡茶色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。この種の壺は前期末に比定するのが一般的であるいは中期初頭に下るという意見もあるが、筆者は口縁上端に粘土帯を貼付する手法は板付II式の古い段階から存在していると認識しており、この壺も日常容器の大形品として、口縁・頸・肩の形態から板付II式の古～中段階頃に比定してよかろうと考える。

これらの土器から類推すると、II-08トレンチ付近は土壙（木棺）墓を主体とする前期中頃から後半にかけての墳墓が主体と考えられる。

9. II-09トレンチ

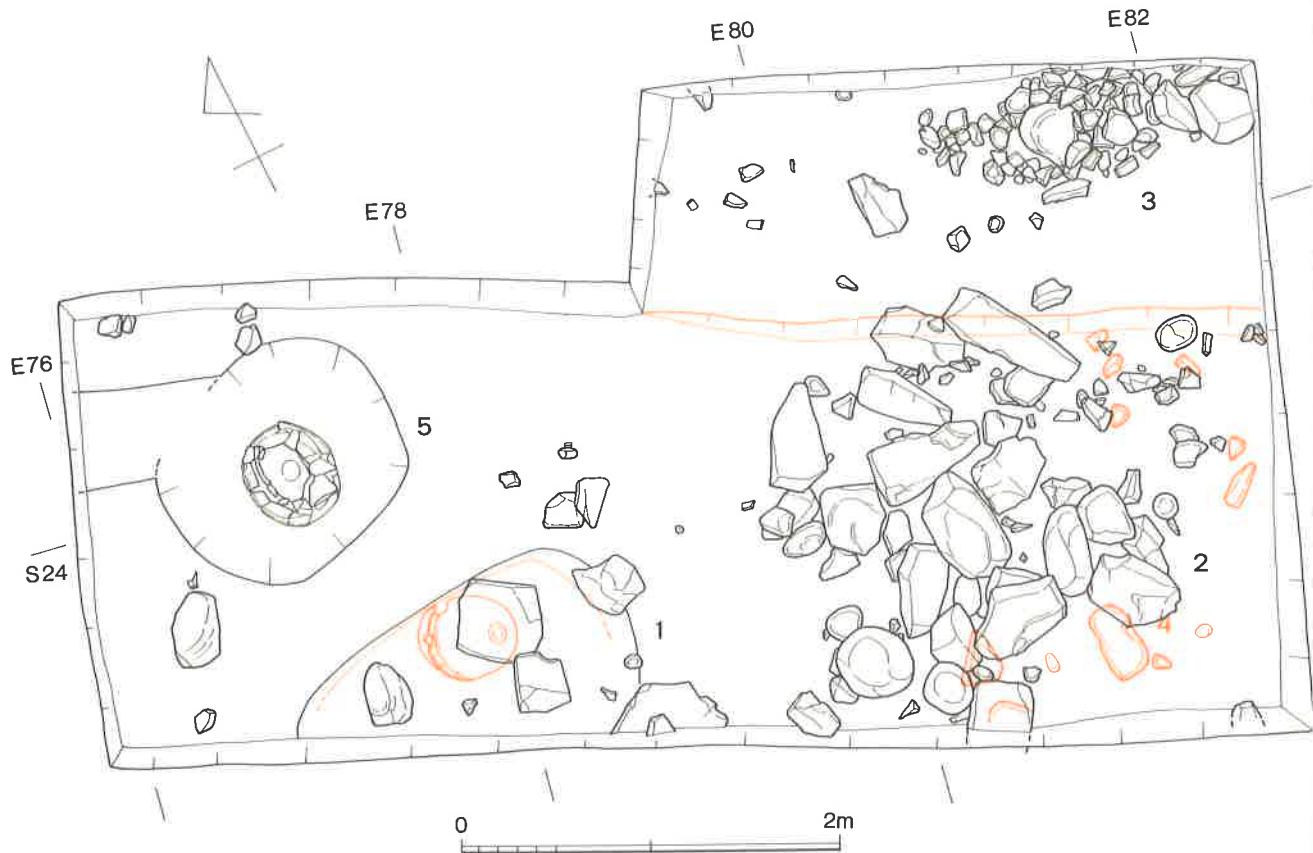
1) II-09トレンチ（第27図、図版6a）

II-07トレンチの東南側へ15m程の地点、小屋の西側に大石があるとの情報を地権者から得ていたので、いかなる遺構が存在するか東西に6.5m、幅2.5mのトレンチを設定し発掘した。東側半分は北側にさらに1m程拡幅した（第3図）。発掘の結果石組が3ヶ所あり1・2・3号墓とした。

1号墓は東西に長く、北側に3個、中央に1個、南側もおそらく3個石が配置されていると思われ、墓標と思われた。

2号墓としたものは主に花崗岩の50cm前後の角礫を組み、K I期の甕棺口縁片等が石の間にあり、大形甕棺の墓標かと思われた。

3号墓としたものは30cm大の玄武岩の円礫を東西にして、花崗岩の小礫を集積していた。この石組の間には鉄滓等もあり、K I期の甕棺の墓標としたら鉄滓の存在は重要なことと考えられるので内部を確認したいと思ったが未掘に終った。ただこの石組中にやや浮いた状態ではあ



第27 II-09トレンチ（縮尺1/50）

ったが弥生後期後半の糸島地方に特徴的な甕棺の凸帯部分の破片等も混じっていた。

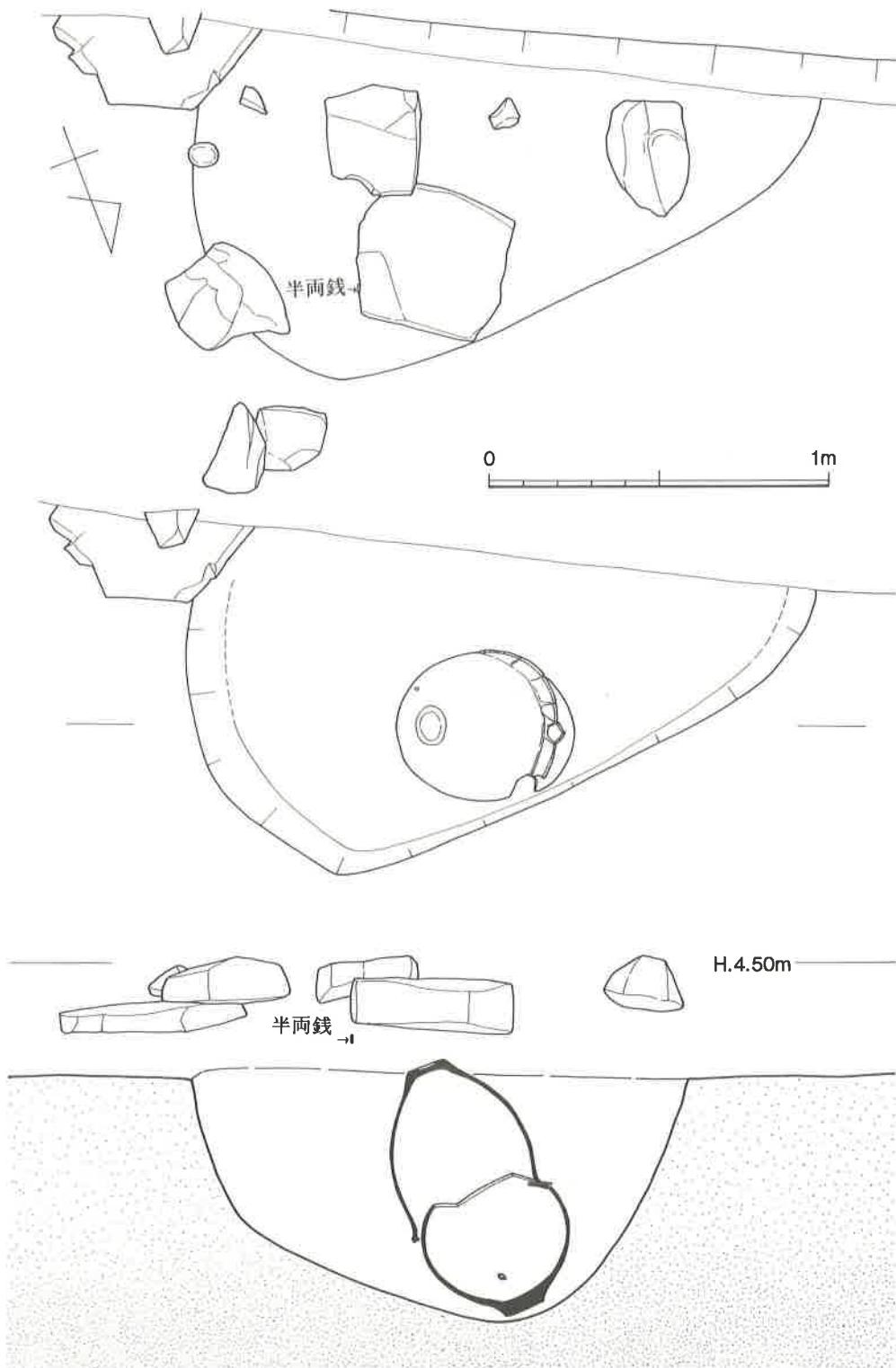
4号墓は2号墓としたものの内部を検出するため石組を取りのぞいた段階で期待した大形甕棺は出土せず、さらに20cm程掘り下げたところより出土した花崗岩と玄武岩からなる30~40cmの大の石である。石の配置からすると墓標と考えられる。2号の石組の下には弥生前・中・後期の遺物の他、土師器・須恵器も出土し、これらの石は付近の墳墓の墓標に用いられていたものを後世に集積した可能性が強い。

5号墓は1号・2号の石組を取りのぞき、内部主体を検出するために少しづつ掘り下げていく過程で出土した甕棺である。

1号墓・5号墓は内部まで発掘したので次に説明を加える。

2) 1号墓（第28図、図版6 b）

東西に長い(190)cm×(100~110)cm程の長円形ともいるべき墓壙の北壁寄りに覆口式の合せ口甕棺を67°の急傾斜で埋置している。下甕には肩から上を打欠いた壺、上甕には甕を用いている。上甕の底部近くには貫通していない穴がみられ、下甕には中心からややずれた位置に穿孔がみられた。墓壙の掘り方を確認したよりも15cm~20cm高い位置に墓標石がある。30~60cm



第28図 II-09トレンチ1号墓実測図（縮尺1/20）

大の板石を北側に3個、中央に1個、南側は1個しか発掘区内で検出していないがおそらく3個配置されているものと思われる。北側の中央の石の東側の下端より5cm程下に半両銭が立った状態で出土した(図版6e)。これは墓壙の掘り方の確認面よりも10cm程高く、又上甕の底部より5cm程高い。この出土状態は石の端からすべり落ちて沈みこんだ状態といってよく、この甕棺墓に伴うものとは考えられない。石組を取りのぞき遺構を検出する過程でも弥生後期土器片等も出土しており、砂地の特殊性として、後世の混入と考えるのが妥当であろう。

3) 1号墓甕棺(第29図、巻頭図版7g・h)

上甕には甕を用いている。器高48.7cm、口径42.4cm、口縁内径38.6cm、胴部最大径は41.6cm、底径は10.0cm。胴部最大径はやや上位にあり、頸はややすぼまり、外反する口縁の上端には粘土帯を貼付する。口縁外側の下端にはヘラによる刻目を施す。口縁下には2条の沈線をめぐらす。底部は6mm程の上げ底である。口縁内外はヨコナデ、外面はハケ目を施すが、ハケ目下に平行タタキの痕跡が観察できる(図版8c)。内面は擦過であるが、タタキアテ具痕と思われる棒木口痕状の痕跡が観察できる(図版8d)。内面は淡黄褐色、外面は暗茶褐色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含み、焼成は硬く良好。

下甕は肩から上を打欠いた大壺を用いている。現存高39.6cm、胴部最大径45.4cm、底径13.8cmを測る。器壁は厚く9~11mmで、底部の厚さは31mmを測る。外底は擦過の後一部ミガキ、外面はハケ目の後に横方向ミガキを加えるが、部分的にハケ目が残っている。内面は横方向擦過で、胴部上半には指圧痕が認められる。今まで棒木口痕としたものに類似するが指紋がみられ明らかに指圧痕である。内底にも指圧痕様のものがみられるが、これには指紋はみられず棒木口痕の可能性もある。内面は淡黄褐色、外面の地は淡茶褐色を呈するが、その上から黒塗りを加えている。胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。底部近くに内から外へと穿孔した小孔がある。

上甕に使用された甕は口縁内側の粘土帯がなければ板付II式ということに異論はなかろう。粘土帯が貼付されるのは大形容器ということによると思われるが、粘土帯を貼付するからといって時期的に下げる根拠にはならないことは筆者が常々説くところである。下甕の壺も器壁・底部が厚くなる等の特徴がみられ、いずれも板付II式の新しい段階つまり前期末頃に比定してよかろう。

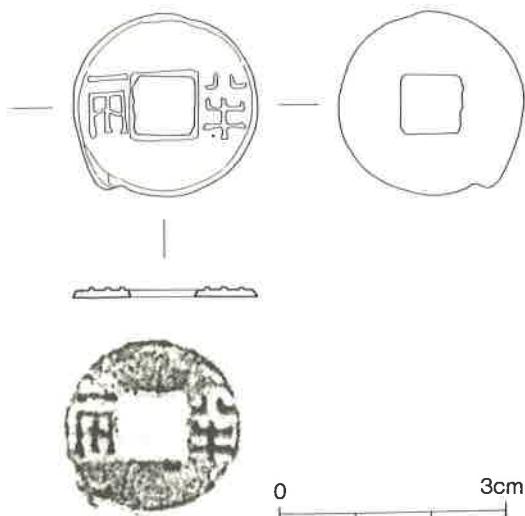
4) 半両銭(第30図、巻頭図版8e、図版7h)

方孔円銭で、周郭・内郭ともにない。穿の右に半、左に両が篆書で鋳出されている。背は無



第29図 II-09トレンチ1号墓葬棺実測図（縮尺1/6）

文である。外径縦24.03mm、横24.00mm、面にはやや稜をつくりその部分の径22.72mm×22.80mm、穿の外法8.30mm×8.30mm、内法9.43mm×9.34mm、「半」の長さ8.50mm、幅5.50mm、「兩」の長さ8.50mm、幅4.82mm、厚さ0.89~0.93mm、字の部分の厚さ1.25mm、重さ1.25gで銅質はよくない。「兩」の字の第4・5劃が十字となり、いわゆる「十字半兩」と呼称される半兩銭であり、大きさは漢文帝5(B.C.175)年以降に鋳造され、武帝元狩5(B.C.120)年まで通用したとされる四銖半兩銭に一致し前漢代のものかとも考えるが、重量を単位とする貨幣が厚さが薄く、重さがきわめて軽い点等はたして前漢代に鋳造されたものか疑問点が残る。



第30図 半兩銭実測図（縮尺1/1）

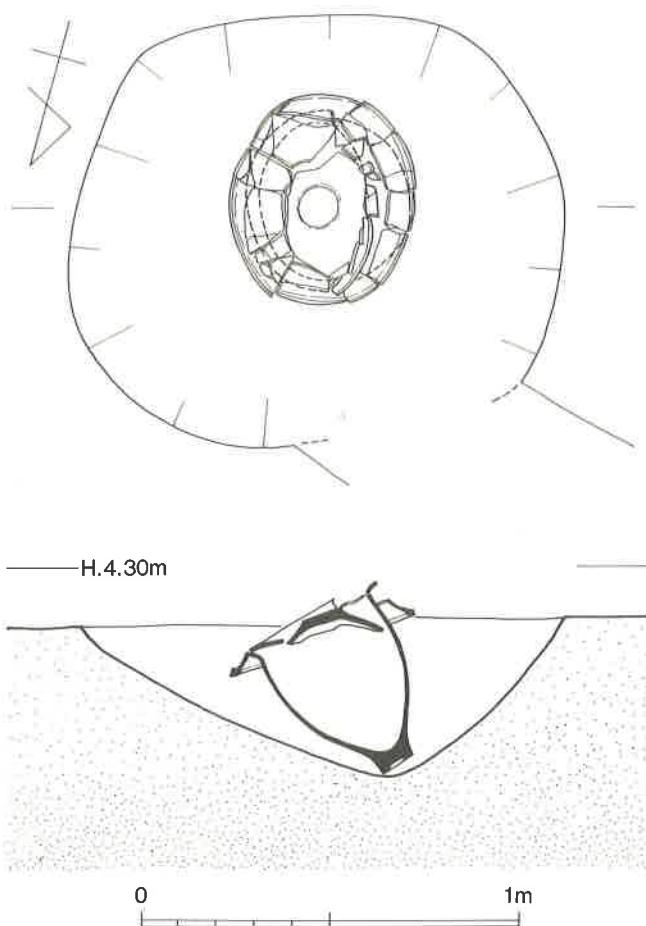
5) 5号墓(第31図, 図版7c・d)

130cm×112cmのやや長円形を呈する墓壙を掘り, そのほぼ中央部に下甕を60°の急斜角で埋置し, 鉢を上甕としてかぶせる。主軸はN-75°-Eにとる。下甕には底部近くの中央からやや南にずれたところに穿孔がある。墓壙の線を確認した面より20cm程上位に, 墓壙の西南の外側に40cm大の花崗岩の礫があり, それより若干下には小壺の口縁片が, 墓壙の北側には15cm大の花崗岩礫2個があったが, 墓標か否かはわからない。

6) 5号墓甕棺(第32図, 卷頭図版8a・b)

上甕には鉢を用いている。器高19.5cm, 口径49.7cm, 底径11cmを測る。器壁も8~12mmとやや分厚い。外反する口縁内側には粘土帯を貼付するが, かなり強く内傾している。口縁内外はヨコナデ, 口縁下の内外は粗いハケ目, 内面はナデ, 外面はハケ目の後ミガキを加えているが一部にハケ目が残っている。内面は淡茶色および暗黄色を呈し, 外面の地は淡茶色を呈する。外面にはさらに黒塗りを施している。胎土にはやや大粒の石英粒を含み, 焼成は硬く良好。

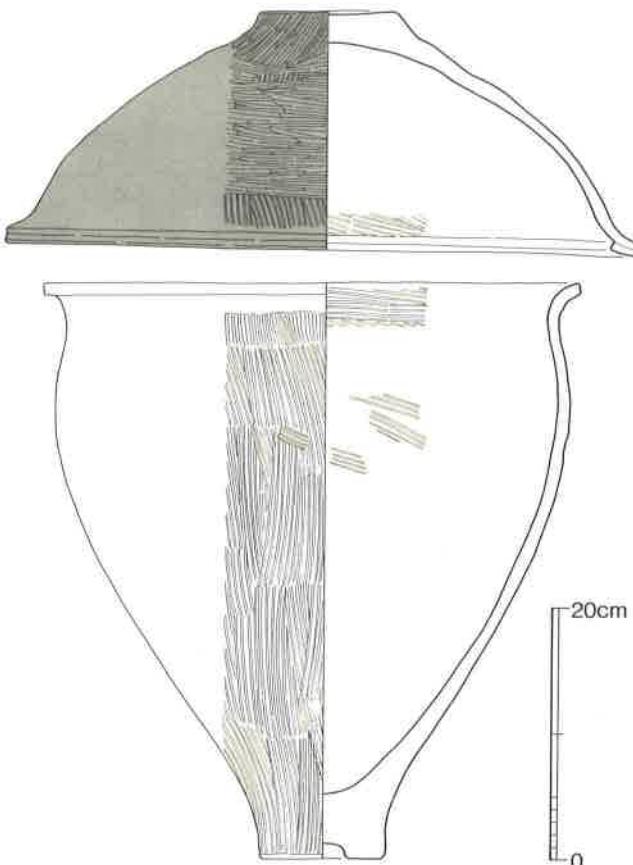
下甕にはやや大形の甕を用いている。器高45.6cm, 口径42.4cm, 胴部最大径40.7cm, 底径9.6cmを測る。器壁は10mm前後でやや分厚い。口縁は



第31図 II-09トレント5号墓実測図（縮尺1/20）

外反し、胸部最大径はかなり上位にあり、底部はしまり、12mm程の上げ底をなす、底部の厚さは39mmと分厚い。内面は粗いハケ目をナデを加えて消し、口縁内面は粗い横方向のハケ目、口縁外面はヨコナデ、外面は粗いハケ目を施す。内面は明茶褐色、外面は暗黄褐色を呈し、胎土にはやや大粒の石英粒をわずかに含み、焼成は硬く良好。

上・下ともに板付II式の新しい段階つまり前期末頃に比定してよからう。

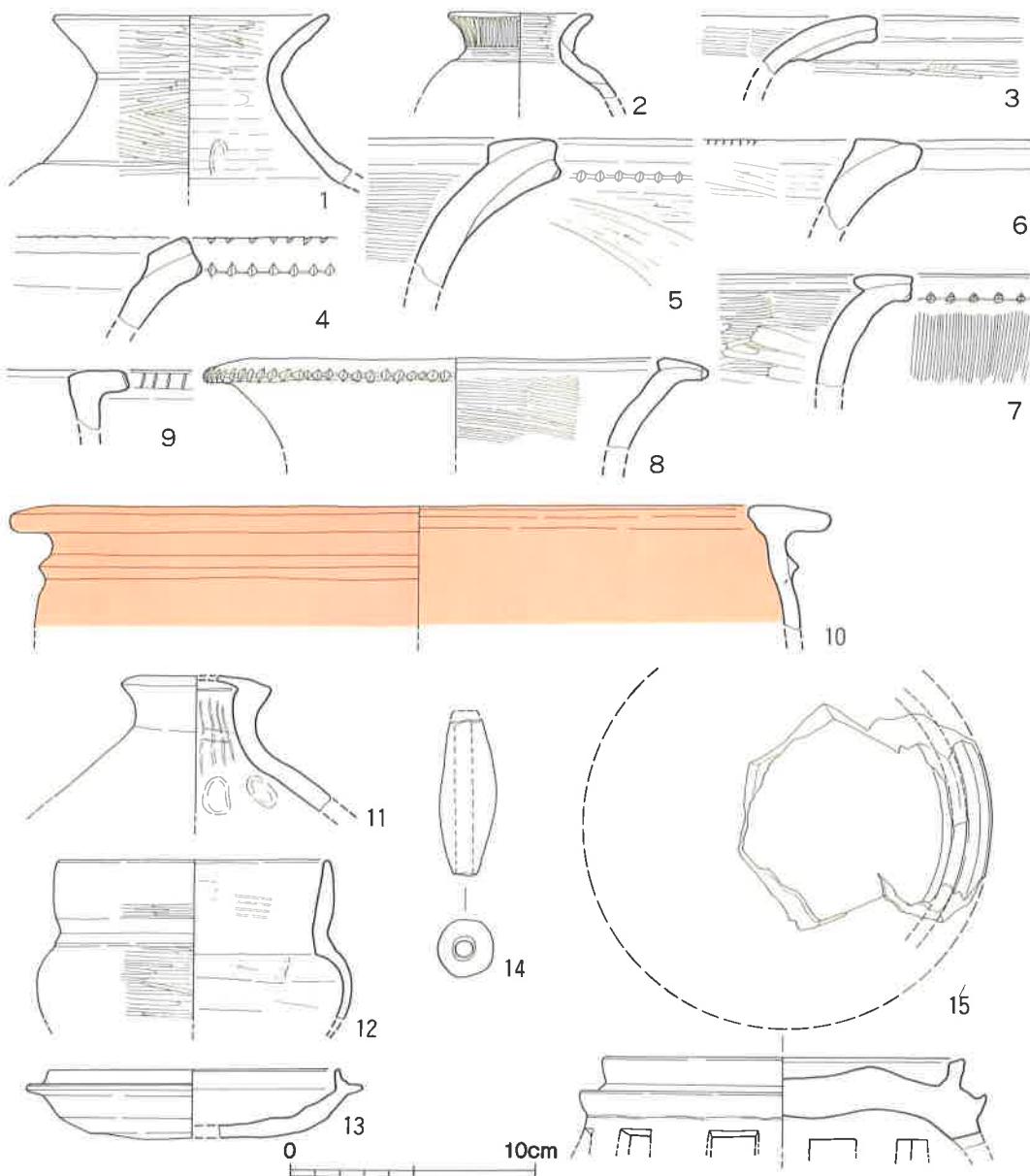


第32図 II-09トレンチ5号墓甕棺実測図（縮尺1/6）

7) II-09トレンチ出土土器（第33図）

1は5号墓西南の墓壙外より出土した小壺口頸部片である。口径は11cm、口縁は強く外反し、口縁下は段を、肩部には沈線状の段をつくる。頸部内面は指圧痕の後粗い横方向ミガキ、口縁内面から外面は横方向ミガキ。淡黄褐色を呈し、胎土には精選粘土を用い白色を呈する。焼成は硬く良好。板付II式の古段階のもので5号墓甕棺よりは先行し、伴うものではなかろう。

2は2号の石組下より出土したものである。口径5.6cmの小壺である。口縁は外反し、口縁下には沈線1条を入れ段を強調する。頸は短かく、肩は段をつくる。胸部内面はナデ、口頸部内面・頸部外面は横方向ミガキ、口縁外面は暗文風の縦方向ミガキ。内面は黒褐色、外面は暗茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。口縁・頸・肩を強調しており板付II式の古段階のものであろう。



第33図 II-09トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）

3も2号の石組の下から出土したものである。大形壺の口縁片で、外反する口縁外側に粘土帶を貼付し肥厚部をつくり、口縁下には段を形成する。内面はハケ目およびナデ、肥厚部はヨコナデ、外面はハケ目の後横方向ミカキ。淡茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。板付II式の古段階に比定できる。

4・5・6はK I期甕棺の口縁片である。4は2号石組の下、5は2号石組の東側、6は2号石組中からの出土である。細部は別として外反する口縁内側に粘土帯を貼付する手法は共通し、板付II式の範疇でとらえられるが、これらの口縁の小片のみでは時期差に言及するのはさしひかえたい。

7は2号の石組の東側で出土した。外反する口縁の上端に粘土帯を貼付する。口縁外側の下端にはハケ目工具による刻目を施す。内面はハケ目の後一部粗いミガキを加え、外面はハケ目。赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。口縁の平坦な面、頸の傾斜等からすると中期に下るものと思われる。

8は3層から出土した壺口頸部片である。口径20.6cmを測る。外反する口縁の上端に粘土帯を貼付し口縁外側にはヘラによる刻目を施す。内面はハケ目、口縁内外はヨコナデ、外面はナデ。茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。7と同じく中期に下るものと思われる。

9は2号の石組下より出土したL字状口縁をなす甕口縁片である。口縁外側にはハケ目工具先端の刺突による刻目を施す。内面はナデ、口縁内外はヨコナデ。淡赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。中期初頭に比定される。

10は2号の石組の東側から出土したものである。L字状口縁をなし、口縁は外側にわずかに低く傾斜する。復原口径は33.6cmを測る。口縁下に1条の三角凸帯を貼付する。口縁から凸帯の間はヨコナデ、他は内外ともに横方向ミガキ。淡黄褐色の地に暗赤色の丹塗りを施す。胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。中期後半頃に比定できよう。

11は2層から出土した蓋形土器である。内面にはしづり痕、指圧痕等がみられ、外面はナデである。淡茶色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。弥生中期の所産であろう。

12は2号の石組下より出土した土師器小壺である。復原口径は11.0cm。口縁はわずかに内彎するくせがみられる。胴部内面は擦過、口縁内面は粗いハケ目の後ヨコナデ、外面は横方向ミガキの後口縁および頸等にヨコナデを施す。内面は淡黄褐色、外面は淡赤褐色、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。口縁の特徴等からみて須恵器の出現する頃つまり5世紀前半頃に位置付けられる。

13は2号石組の下から出土した須恵器壺身である。復原口径11.8cm、蓋受け部径13.8cm。内底はナデ、体部・口縁の内外はヨコナデ、体部から底部に移る境は回転ヘラ削り、外底はナデ、外底にはヘラ記号もある。青灰色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。6世紀末頃に位置付けられている。

14は2層から出土して土錘で茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。重量は31.4gを測る。

15は2号の石組の直上、2層から出土した須恵器円面鏡である。復原口径14.6cm。中央部は

使用のためやや磨滅している。中央部より外側はやや高くはなっているが、図示したふくらみは焼きぶくれである。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。奈良時代頃のものであろう。

8) その他の遺物（第34図、第43図3）

第34図1・2はともに2号の石組中から出土した石錘である。花崗岩の円礫の両端を打欠いたもので、1は450g、2は278gを測る。

3は5号墓の上部で出土した凹石で花崗岩の円礫を用いている。両面ともにわずかに凹む。

4は2号の石組中から出土したもので黄褐色を呈する緻密な砂岩製のものである。厚さ5.7cm、復原径19cm程に成形し、その中央部に復原して5cm前後の円孔を穿ったものである。錘の一種と思われ、碇等の用途をもつものであろうか。

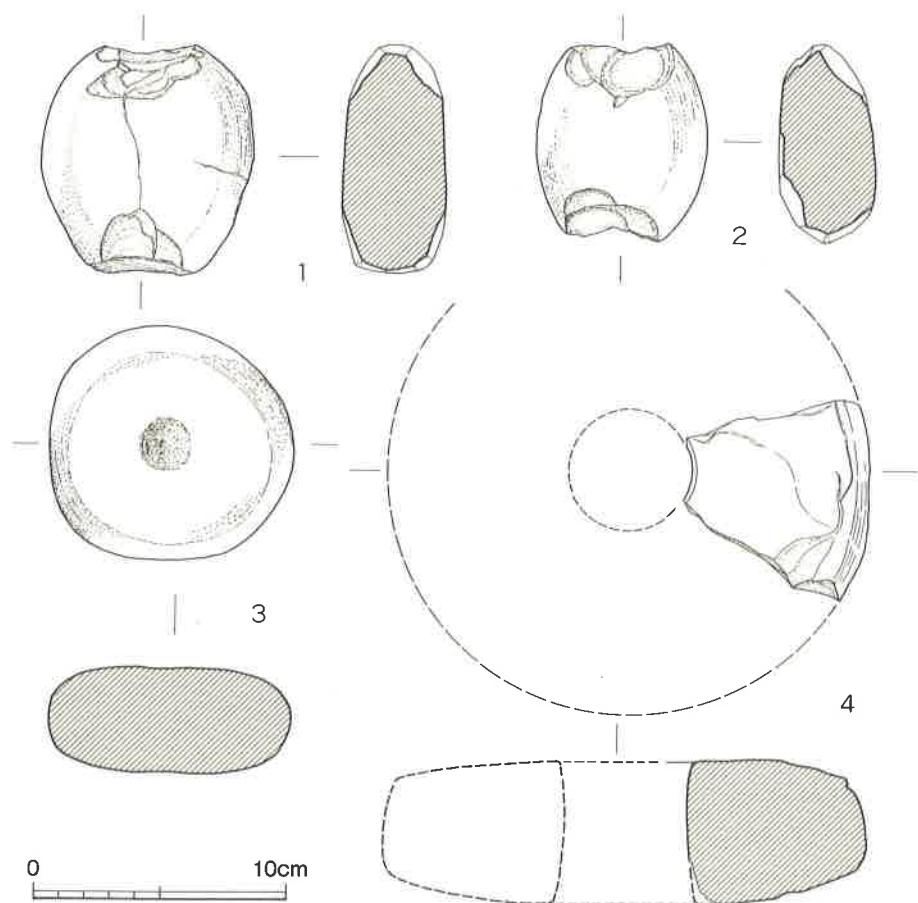
第43図3は2層から出土した銅地金張りの耳環である。外径22.7cm×20.5cm、内径13.2cm、断面径5.0~7.2mmを測る。

10. II-10トレンチ

1) II-10トレンチ（第35図）

II-09トレンチから東へ15cm程のところに畠の境界石としては大きな、立石らしきものがある。その石の東側の畠に南北に8m、幅2mのトレンチを設定し発掘した（第3図）。表土は約30cmあり、表土を除去したところで1号墓甕棺の上甕底部が露われた。墓壙は3層目から確認され、2層目までは既に攪乱を受けた層であることが判明したが、1号墓および2号墓の甕棺はその一部および大半が2層中にある。2層からはK I c式の甕棺片および楕形鉄滓等が出土した。又2層から掘り込んだ溝状の遺構を確認した。この溝からはK I c式の甕棺片および鉄滓等が出土した。この甕棺は溝によって攪乱を受けて破碎されたものであろう。墓壙は3層から掘り込んでおりトレンチの南側で1号墓、その東に接して2号墓があり東壁の断面中に甕棺がみえていた。トレンチの北寄りには185cm×120cm程の3号墓墓壙があり、橋口の分類によるK III a式の合口式の大形甕棺の口縁がわずかに見えていた。1号墓のみ発掘して、2・3号墓は未掘のまま埋めもどした。

2) 1号墓（第36図、図版7e・f）

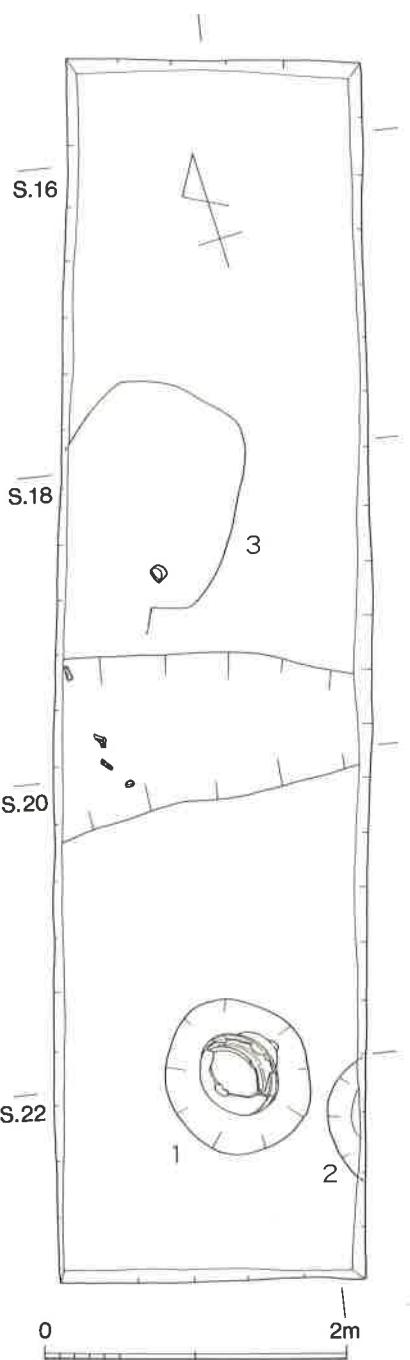


第34図 II-09 トレンチ出土石器実測図 (縮尺1/3)

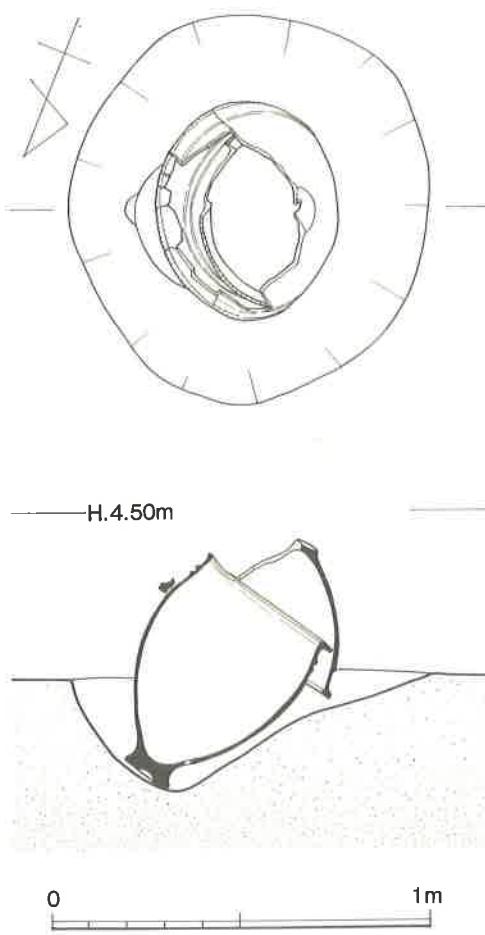
96cm×103cmのほぼ円形墓壙の中央に55°の急な傾斜角で下甕を埋置し、鉢で蓋をする覆口式の合口甕棺である。上甕は浅いせいもあって上部 $\frac{1}{3}$ 程が割れている。下甕の底部近くのほぼ中央に位置するところに穿孔が認められた。人骨の出土はなかったが幼児用のものであることは明らかである。

3) 1号墓甕棺 (第37図, 卷頭図版8c・d)

上甕には本来甕棺専用として用いられる大形の鉢を使用している。器高は31.2cm, 口径57.0cm, 底径12.8cmを測る。外反する口縁の上端に粘土帯を厚く貼付し、口縁は平坦につくる。口縁外側の上下にはハケ目工具による刻目を施す。口縁下には三角凸帯1条をめぐらす。胴部内面は擦過の後ナデ、内面の口縁下は横方向ミガキ、口縁内面から凸帯下まではヨコナデ、外面



第35図 II-10トレンチ(縮尺1/50)



第36図
II-10トレンチ1号墓実測図(縮尺1/20)

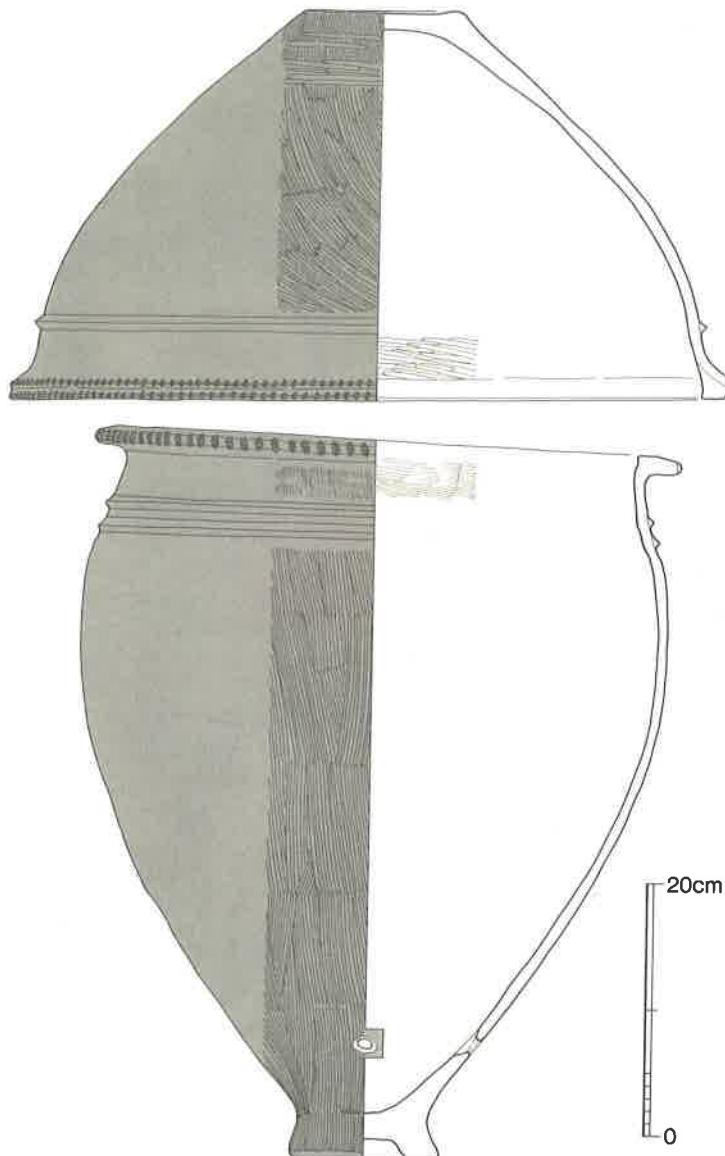
含み、焼成は硬く良好。

下甕には日常容器の大甕を用いている。器高57.5cm、口径46.6cm、口縁内径39.2cm、胴部最大径46.4cm、底径11.9cmを測る。口縁は逆L字状口縁をなし、口縁端にはハケ目工具による刻目を施す。口縁下には2条の三角凸帯をめぐらす。胴部最大径はやや上位にある。底部はしり、又15mm程の上げ底をなす。胴部内面はナデ風の擦過、内面の口縁下はハケ目、口縁内面から口縁下まではヨコナデ、胴部外面はハケ目を施す。底部近くに外から内へと穿孔した径20mm前後的小孔がある。内面は明茶色

はハケ目の後ミガキ。底部近くにはハケ目がよく残る。ミガキ方向は底部近くが横、その上が縦、さらに上が斜方向となっている。内面は暗茶褐色、外面は黄褐色～茶褐色の地に、黒塗りを加えており淡黒褐色を呈する。胎土にはやや大粒の石英粒をわずかに含み、焼成は硬く良好。

～淡茶褐色、外の地は茶色の上に黒塗りを加える。胎土にはやや大粒の石英粒をわずかに含み、焼成は良好。

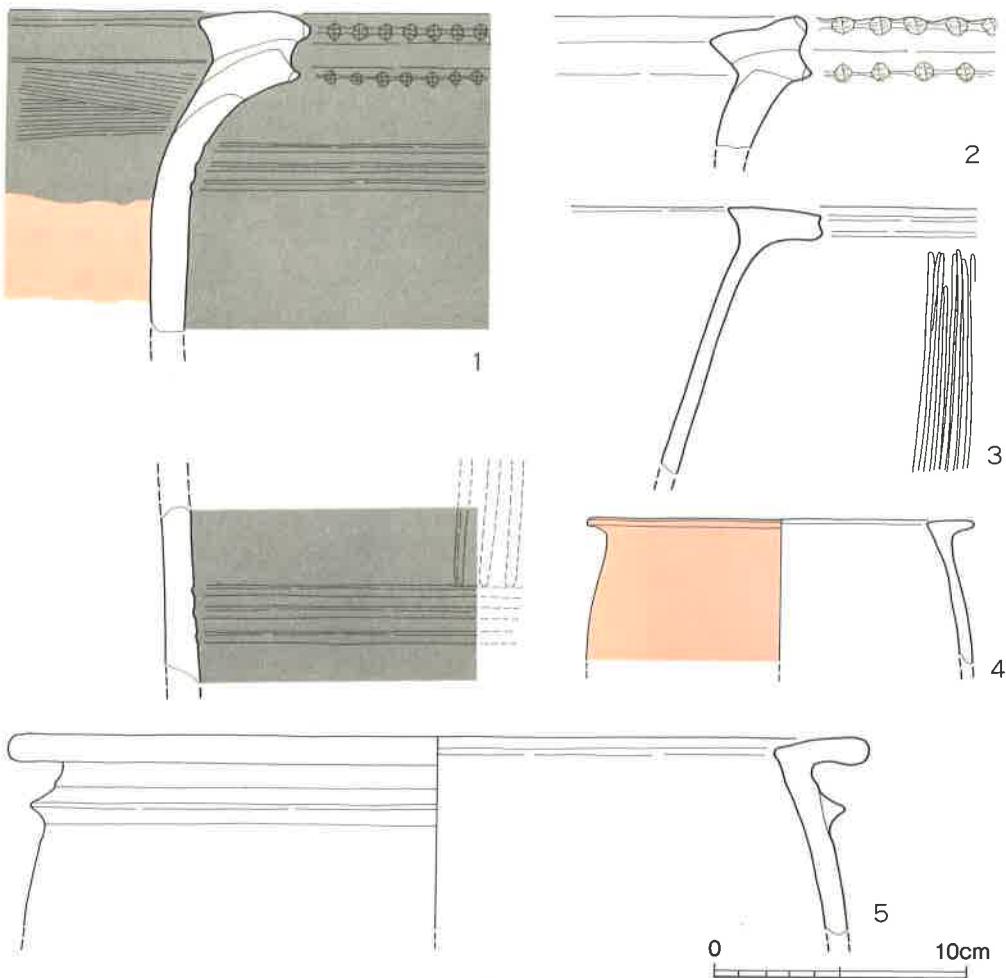
上甕はK I期の甕棺の特徴をよく残しているが、口縁が平坦な点、口縁下に凸帯をもつなど新しい要素といつてよからう。下甕は逆L字状の口縁がよく発達しているが、全体としては中期初頭の特徴をもつ。以上のことからこの甕棺墓は中期初頭のものでやや新しい要素をもつものと把えてよからう。



第37図 II-10トレンチ1号墓甕棺実測図（縮尺1/6）

4) II-10トレンチ出土土器（第38図）

1は溝内から出土した大形甕棺片である。頸部はやすばまり、口縁の外反度は弱く、その上端に粘土帯を2重に貼付して口縁を平坦につくる。口縁外側の上・下端にはハケ目工具によ



第38図 II-10トレンチ出土土器実測図（縮尺1/3）

る刻目を施す。口縁下および肩には3条の沈線をめぐらし、又縦沈線の一部も残る。頸部内面はナデ、内面口縁下はハケ目、口縁内外はヨコナデ、頸部外面はナデ風の斜方向擦過、肩部沈線の直上より下は擦過。内面は茶褐色を呈するが、頸部内面の一部までは丹塗り、口縁内面から外面にかけてはさらに黒塗りを加えている。胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は硬く良好。口縁のつくり、口・頸部の傾斜等K I期の甕棺としては新しい要素でありK Ic式としてよい。

2も同じくK Ic式の大形甕棺片で2層からの出土である。わずかに外反する口縁上端に2重に粘土帯を貼付してやや内に低く傾斜する口縁をつくる。口縁外側の上下端にはハケ目工具による刻目を施す。内面は擦過、口縁内外はヨコナデ、外面はナデ風の擦過。内面は暗茶褐色、外面は黒褐色を呈し黒塗りの可能性がある。胎土には大粒の砂粒を少量含み、胎土はややもろ

いが表面は硬く焼きしまり良好。

3は壺口縁片である。口縁内外はヨコナデ、他の部分はナデ、頸部に単位12本以上の暗文を施す。内面は黄褐色、外面は黒褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。中期前半頃のものであろう。3層からの出土である。

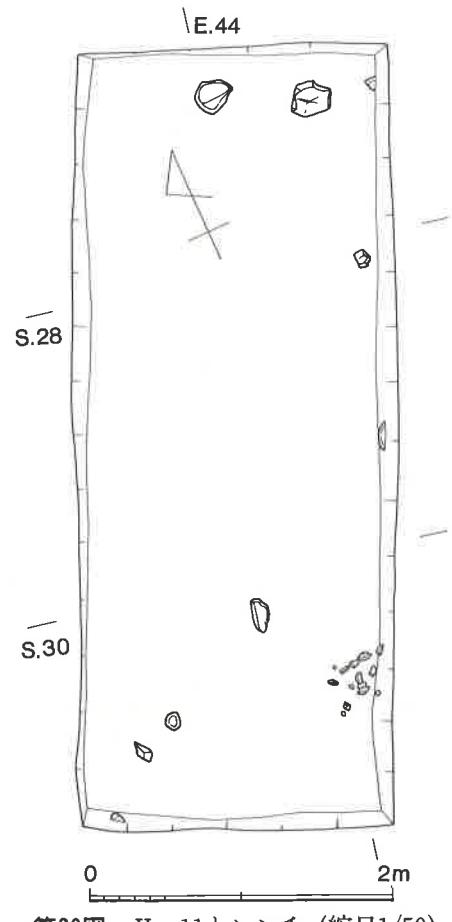
4は丹塗り磨研の甕で、復原口径15.2cmを測る。口縁は逆L字状を呈する。内面はナデ、口縁内面はヨコナデ、口縁はミガキ、胴部は横方向ミガキ。地色は赤褐色、丹は暗赤色を呈する。胎土にはわずかに砂粒を含む精選粘土を用い、焼成は硬く良好。中期後半頃のものであろう。3層からの出土である。

5は口径33.4cmを測る甕である。口縁は逆L字状をなし、口縁直下に三角凸帯をめぐらす。内面はナデ、口縁内外はヨコナデ、外面はハケ目の後ナデ。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良好。凸帯の位置が口縁直下にある等の点から中期後半頃のものと考える。2層からの出土である。

11. II-11トレンチ

1) II-11トレンチ (第39図)

倉庫の建設が予定されているとの話を聞いたのでII-05トレンチの西端から南へ13m程、II-07トレンチから西南へ20m程の地点に南北に5m、幅2mのトレンチを設定し発掘した(第3図)。表土下85~90cmで遺構面である4層に達する。4層は南へ次第に低くなっている。トレンチ北端で支石もしくは標石としては手頃な25cm大の花崗岩礫2個が出土しているが、東側のものはかなり浮いており、遺構面にあるのは西側の石であり、これが墓標もしくは支石であるかの判断はできなかった。その他の石もすべて遺構面である4層よりは浮いており遺構とは直接関係はないと思われる。出土の遺物は2・3層からのものである。

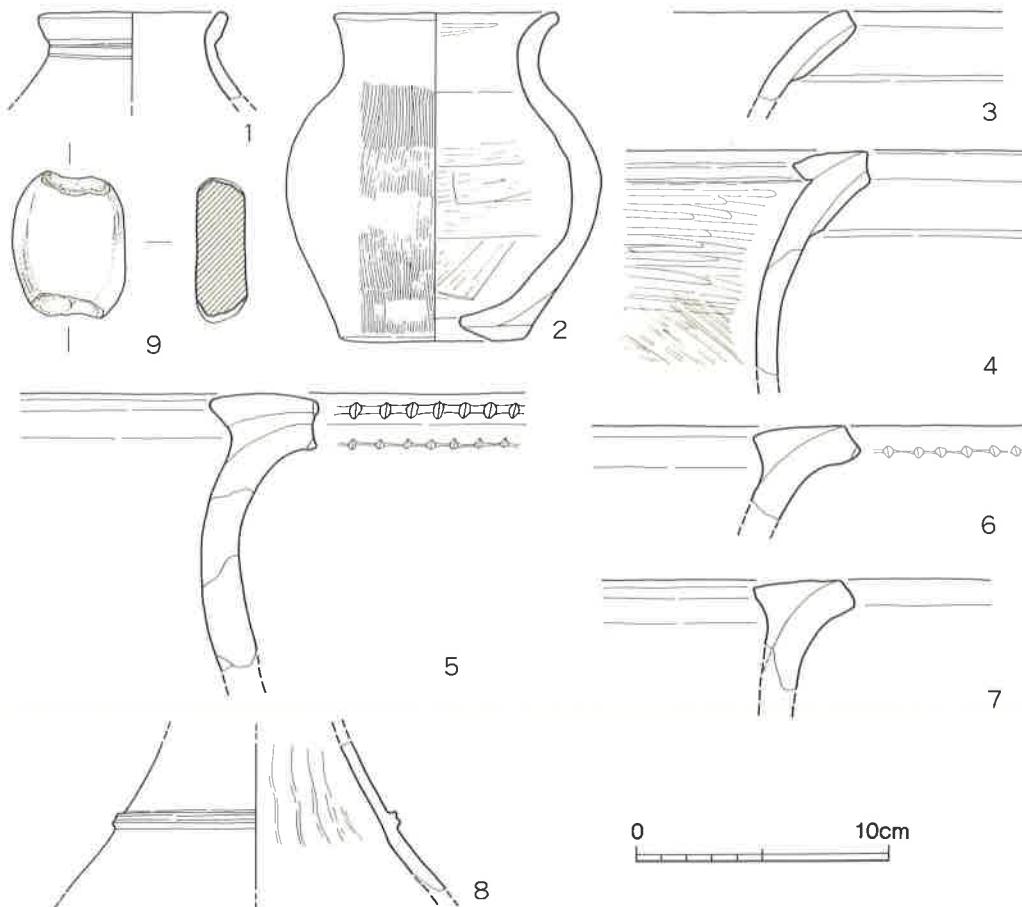


第39図 II-11トレンチ (縮尺1/50)

2) II-11トレンチ出土の土器・石器（第40図）

1は3層出土の小壺片である。復原口径は7.0cm。口縁は外反し肥厚部をつくり、口縁下には段および2条の沈線をめぐらす。頸部内面はヨコナデ、口縁内面から外面は横方向ミガキ。茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。古い要素をもち、下げても板付II(古)式までであろう。

2は3層から出土した小壺で散在していたものが接合されればほぼ完形品となった。本来副葬小壺と考えられる。したがってII-11トレンチに遺構が存在しないとは言えない。器高12.9cm、口径8.6cm、胴部最大径12.4cm、底径7.3cmを測る。口縁は外反し、頸は短く、口縁から肩へはなだらかに移行する。底部には内から外へ穿孔した小孔がある。内面には擦過、口縁内面は一部横方向ミガキ、口・頸部はヨコナデ、胴部は細いハケ目の後、部分的にナデている。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。前期後半～末頃に比定できよう。



第40図 II-11トレンチ出土土器・石器実測図（縮尺1/3）

3は3層から出土した大形壺の口縁片である。外反する口縁外側に粘土帯を貼付し肥厚部をつくり、口縁下には段を形成する。口縁端はヨコナデ、他は内外ともに横方向ミガキ。茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。この種口縁の手法は板付I式～板付II(古)式のものである。

4は3層から出土した大形壺の口縁片である。外反する口縁外側に粘土帯を貼付し肥厚部をつくるとともに、口縁内側にも粘土帯を貼付する。頸部内面は擦過、口縁内外はヨコナデ、内面の口縁下および外面はミガキ。赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。口縁外側に肥厚部をつくる手法は板付II(古)式の段階までのものであり、口縁内側に粘土帯を貼付する手法は板付II(古)式以後のものであり、まさに板付II(古)式に位置付けられよう。そして大形品であることから甕棺専用につくられたものと考えられ板付II(古)式の大壺とするよりはK I a式の甕棺口縁片と把えるのが妥当であろう。

5は2層より出土した甕棺口縁片である。外反する口縁上端に粘土帯を2重に貼付し、口縁は平坦につくる。口縁外側の上・下端にはヘラによる刻目を施す。内面はやや粗いミガキ、口縁はヨコナデ、外面は風化のため調整法は不明。明茶色を呈し、胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良好。K I c式に属する。

6は3層出土の甕棺口縁片である。外反する口縁内側に粘土帯を貼付し、口縁外側の下端にはヘラによる刻目を施す。調整法は風化のため不明。淡黄褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を多く含み、焼成は良好。K I期に属する。

7は3層から出土した甕棺口縁片である。外反する口縁の上端に粘土帯を貼付する手法は6等と同様であるが頸の内彎度はかなり弱そうであり、K II a式のものと考えられる。

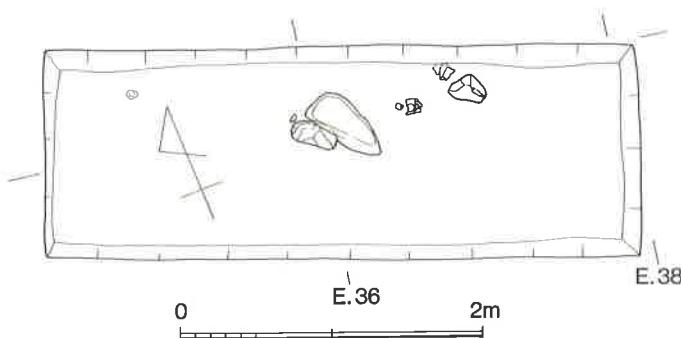
8は袋状口縁壺の肩部片である。肩にはM字凸帯を貼付する。内面にはしづり痕が残る。外面は風化のため調整法は不明。淡茶色を呈しているが本来は丹塗り磨研のものである。胎土には細粒の砂をわずかに含むが精選粘土を用い、焼成は良好。中期後半のものである。

9は2層出土の石錘で、花崗岩礫の両端を打欠いている。重量は86.1gを測る。

12. II-12トレンチ

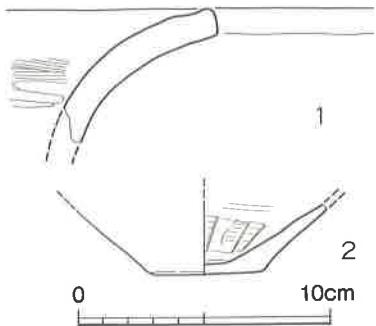
1) II-12トレンチ (第41図、図版7g)

II-05トレンチにおいて、5号墓としたもの、1号甕棺墓、2号甕棺墓を検出し、夜臼式から始まり板付I式を主体とする新たな墓域の一部を確認したので、この墓域の範囲を確認する目的をもって、野菜類のあい間をぬって、道路をはさんでII-05トレンチの南側に東西4m、幅1.4mのトレンチを設定し発掘した。表土下80cm程で遺構面に達するが、トレンチのほぼ中央



第41図 II-12 トレンチ (縮尺1/50)

部の北壁寄りに花崗岩礫3個が検出され、その間に副葬小壺らしき壺底部および大壺口縁片等が出土した。これらの石の上面はほぼ同じ高さがあり、支石もしくは墓標と考えてよかろう。

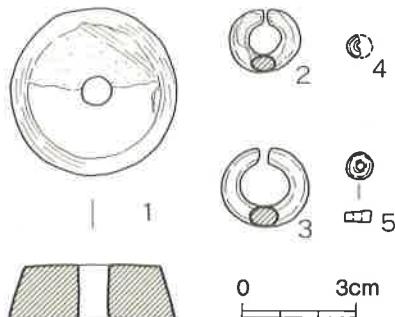


第42図 II-12 トレンチ出土土器
実測図 (縮尺1/3)

2) II-12 トレンチ出土土器(第42図)

1は2層から出土した大形壺口縁片である。内面の頸部はハケ目の後ミガキ、口縁はヨコナデ、外面は風化のため調整法は不明。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。

2は副葬小壺で底部付近のみ残存する。底径は4.6cm。内面は擦過、外面は風化のため調整法は不明。明茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。前期の所産であろうが、時期は確定できない。



第43図 第2次調査出土のその他の遺物
(縮尺1/2)

III. おわりに

1. 調査の成果と課題

第1次調査第1地点においては弥生早・前期の支石墓を含む57基の墳墓を検出した。弥生早・前期の墳墓といえばそれ自体が貴重な資料となるものであるが、なかでも弥生文化成立期の人骨を個体数は少ないとはいえたはじめて発掘できたことは特筆すべき成果であった。又これら弥生早・前期の墳墓の多くは副葬小壺をもち、これらの分類を基に曲り田（古）式～夜臼式までの弥生早期の、板付I式を主体とする弥生前期前半の墓域を明らかにできた。⁽¹⁾

第2次調査は以上の成果に基づき、まず第1は弥生早・前期の墓域を確認すること。第2には、かつて鉄戈を出土した地点（第2図）をはじめ、大字新町と大字御床を画する道路より以東はいままで中期後半の甕棺が出土したことが伝えられ、東側に行くにつれ墳墓の時期が下ることが予測され、又新町の畠のいくらかに大石が存在するとの情報を得ていたので、新たな墓域の確認と墳墓の時期的変遷を把握することを目的とした。

まず第1地点で把握した弥生早期の墓域の広がりについてはII-01, II-04トレントを設け、II-01で墓域の西端、II-04で墓域の東北側の一端を確認できた。

弥生前期前半の墓域の広がりについては、II-02a, II-02b, II-03トレントを設けてその把握につとめた。II-03トレントでは4号墓とした支石墓上石付近で墓域がとぎれるようであり、これが墓域の東端を示すものといえるが、当初予測したよりも東側にかなり張り出している。II-02bトレントではその東南の一端が確認され、II-02aトレントではまだその南端を確認できなかったが、II-02aトレントから大きく南へずれることはなく、トレント南端でほぼ墓域の南端に近いといえよう。

II-06トレントをのぞき、他のすべてのトレントでは墳墓が確認された。まずII-05トレントでは前述の弥生前期前半の墓域とは明らかに別な夜臼式から始まり板付I式を主体とする墓域を確認したといえよう。その広がりについてはII-12トレントで一部を把握したのみで今後の課題といえよう。

又II-07, II-08, II-09トレントにおいては弥生前期後半～末頃の木棺墓・土壙墓・甕棺墓等の墳墓が存在することが明らかとなったが、墓域の広がりを確認するところまでは調査を行なっていない。

II-10トレントになると明らかに中期の墓域となり甕棺墓を主体とすることが把握され、これより東側の今まで知られていた中期後半の甕棺墓へと連なることを予測し得た。

これらの墳墓は砂丘の頂部より北側において営なまれており、砂丘の南側つまり海へ面した

地点には存在しないようである。そして時期的には第1地点の弥生早期の墳墓群の形成を始まりとして、時期を追うごとに次第に東側へと墳墓群が営なまれ、中期後半までは確実に東側へと時期的に変遷している。

墳墓群の形成については、第1次調査でK I期の甕棺墓群が西側に存在することを確認したが、今回の調査においては墓域の西側への変遷は追求しなかった。今後この点も含めて全容を解明するならば、弥生文化成立期から少くとも中期後半まで連綿と続く弥生時代の墓地の変遷、埋葬人骨の形質人類学的研究等に大きく寄与することはいうまでもない。

K I c式の大形甕棺は“金海式甕棺”と通称されているが、今回この大形甕棺を発掘し、かつて中山平次郎先生が紹介された新町の甕棺から“新町式”⁽³⁾という名称をこの甕棺に復活させたいという希望をもっていたが、残念ながら大形甕棺を発掘できなかった。金海式というよりは北部九州の遺跡名を冠することがこの型式の甕棺にとっては適切であると考えている。今後再び発掘する機会があったら、この課題に再度挑みたい。

今回の調査では墳墓群のみの確認調査で終了した。遺跡の北側には幅150m程の水田地帯があり、稲作開始期の水田形成にはきわめて良好な条件をもっていたものと考えられる。又墳墓群の東北側には水田部分より比高1m程、墳墓群の存在する砂丘とほぼ同じ高さ程の砂丘があり、住居跡等の存在が予測される。この砂丘は先年調査された御床松原遺跡へと連なっている。御床松原遺跡でも下層で縄文後・晩期の土器が確認されており、この砂丘にこれらの墳墓を営んだ弥生文化成立期の人々の住居跡群が存在する可能性は大きい。今回水田あるいは住居跡等の存在が予測される地点の調査を行なえなかつたが、今後これらの点も意識的に追求する調査を行なう必要があろう。

- 註1. 志摩町教育委員会「新町遺跡」志摩町文化財調査報告書第7集 1987
2. 大神邦博「糸島郡志摩村新町発見の鉄戈について」糸島高校郷土史『いと・しま』6号 1965
3. 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて(一)」考古学雑誌7-10 1917
中山平次郎「福岡地方に分布せる二系統の弥生土器」考古学雑誌22-6 1932
4. 志摩町教育委員会「御床松原遺跡」志摩町文化財調査報告書第3集 1983

2. 半両銭・貨泉について

1) はじめに

新町遺跡および隣接する御床松原遺跡においては大正6（1917）年に中山平次郎先生が貨泉を採集され紹介された後⁽¹⁾、居住地である御床松原遺跡より半両銭1枚、貨泉2枚、墳墓群である新町遺跡で半両銭1枚、貨泉1枚、計6枚の漢代貨幣が出土し⁽²⁾、1遺跡における出土数としてはかなり多いものといえる。

半両銭は秦および前漢前半代、貨泉は新王莽代に鋳造されたものとして知られ、これらの貨幣が鋳造後まもなくあるいは通行中に日本にもたらされたものであるならば、日本における弥生時代の年代の一端をうかがい知る重要な遺物であることはいうまでもなく、日本出土の貨泉のうちいくらかはこのような年代を推定し得る出方をしている。しかしながらこれら御床松原、新町出土の6枚の貨幣の出土状況は今回の半両銭を含めて年代を決め得るようなしっかりした遺構からの出土とはい難く、以前からこれら貨幣の流入の時期について考えるところがあつたので、この問題に若干ふれてまとめの一部としたい。

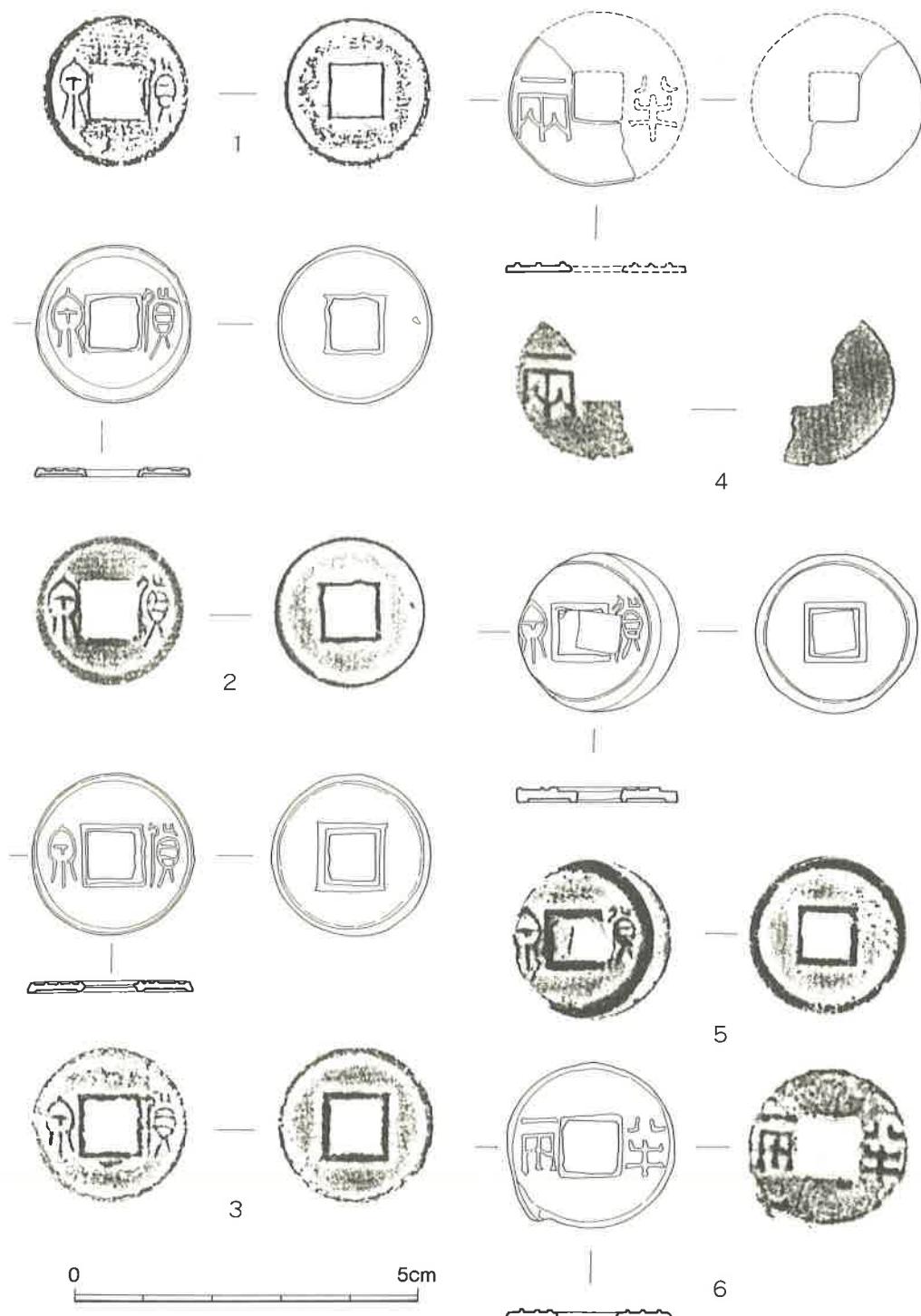
2) 御床松原・新町出土の半両銭・貨泉（第44図、巻頭図版8e）

1は中山平次郎先生が採集されたもので、その出土推定地は第2図に示すところである。中山報文には径、重量等の記載はなく、現在京都大学に保管されており、実測する機会を作れなかった。

2は御床松原D6区3層下部出土のものである。径22.08mm×22.06mm、面の周郭内径19.69mm×20.13mm、背の周郭内径20.29mm×20.34mm、面には孔郭はなく稜をつくるのみである。穿の外法9.02mm、内法7.51mm×7.36mm、背には孔郭をつくり9.30mm×9.05mmを測る。穿の右側に「貨」、左側に「泉」を篆書で鋳出する。貨の長さ10.71mm、幅4.53mm、泉の長さ9.96mm、幅5.47mm、郭の厚さは1.22～1.28mmで、重量は1.30gを測る。背には穿の右側、周郭近くに1点がある。

3は御床松原63号住居跡床面下の包含層から出土したものである。面背ともに周郭をもつ。外径22.86mm×22.82mm、面の周郭内径20.09mm×20.88mm、背の周郭内径20.27mm×20.31mm。面背ともに孔郭をつくる。面の郭長9.16mm×9.16mm、背の郭長10.42mm×10.50mm、穿の内法6.85mm×6.9mm。穿の右に「貨」、左に「泉」を篆書で鋳出する。貨の長さ10.09mm、幅4.68mm、泉の長さ9.36mm、幅4.81mm。郭の厚さは1.48mm～1.88mm、重さは2.65gを測る。

4は御床松原のD6区3層下部より出土した半両銭の半分弱の破片である。現存する長さ23.



第44図 御床松原・新町遺跡出土の半両銭および貨泉（縮尺1/1）

1. 大正6(1917)年出土 2~4. 御床松原遺跡 5·6. 新町遺跡

69mmで、復原径は25mm程になろう。方穿の左に「両」字が篆書で鋳出され、右側には当然「半」字があったものである。両の長さ9.40mm、幅7.48mm。両の5割～8割は「人」の字をなし人字半両と通称されるものである。厚さは0.82mm、字の部分で1.18mmを測る。現存する部分は360分の162程である。現存の重さは1.0gを測り、これから重さを復原すると2.22g程になる。

5は第1次調査第2地点の包含層より出土した貨泉である。面背の鋳造がずれている。径は23.33mm×23.37mm、面の郭幅は2.57mm、背の郭幅2.13mm、面の孔郭の外法9.01mm×8.54mm～8.66mm、背の孔郭外法9.53mm×9.45mm、内法は5.89mm×6.32mm。穿の右に「貨」、左に「泉」を篆書で鋳出する。郭厚2.1mm、重量2.85gを測る。

6は今回の調査で出土した半両銭で径24.03mm×24.00mm、厚さ0.89mm×0.93mm、重さ1.25gを測る。

3) 半両銭・貨泉の流入の時期について

2～6は調査で出土したものであるが、御床松原出土の2・4の出土したD6区3層下部の土器については報告者は中期後半～後期前半のもので、これら貨幣も後期前半頃に移入されたものであろうとしている。⁽³⁾ところで御床松原D6区3層下部の報告者の年代観については筆者は異論をもっている。たとえば御床松原遺跡の第83図403に図示された壺は報告者は内傾した鋤先状口縁とし、後期前半頃に位置付けているものと思われるが、筆者はこの種の口縁内側に蓋受状に粘土帯を貼付する手法は中期の鋤先状口縁からの系譜を引くものでなく、北部九州の後期後半以後に出現するもので弥生終末期頃に多くみられるものであると考えている。したがって第83図403に図示されたものは後期後半頃のものであり、図示された以外にこの土器と同時期のものと考えられるものがD6区3層下部からは出土していると認識している。D6区3層上部から出土した内傾する鋤先状口縁の壺とされる第87図495、496、第88図514、515等も同様の手法をもつもので後期後半頃のものと考える。したがってD6区3層下部から出土した半両銭・貨泉は後期前半頃のものとするよりも後期後半頃に位置付けるのが妥当ではないかと考える。

新町出土の半両銭は前期末頃の甕棺墓の墓標石下より出土したが前述したように石の端をすべり落ちて沈んだような状態で出土しており、甕棺墓に伴うものではないと判断した。墓標石下にも甕棺より下る時期のものが存在し、後期後半頃の土器も存在することから、この半両銭も同じく後期後半頃に伴うものと考えられる。

弥生時代後期後半頃といえば後漢後半頃つまり桓～獻帝の頃に比定できよう。この頃後漢の内政は大いに疲弊し、経済も混乱をきたしている。たとえば洛陽焼溝漢墓、洛陽西溝漢墓等を例にとっても、この時期には通貨である五銖銭に混じて半両銭、貨泉等の王莽銭等も多量に出土している。経済の混乱に乗じて過去に通用した貨幣をもちだし、又私鑄銭も出現した結果で

あると考える。

出土した半両銭はその大きさ、字体等からして漢文帝5（B.C.175）年以降に鋳造され、武帝元狩5（B.C.120）年まで通用したとされる。四銖半両銭に一致している。四銖半両銭の重さは秦の十二銖半両が7.2g⁽⁵⁾、漢高后2（B.C.186）年に鋳造されたとする八銖半両が4.6gであることからすれば、2.3g程のものになると思われる。以上のことからして御床松原D6区3層下部出土の半両銭は前漢代に鋳造されたものとみてよかろう。今回II-09トレンチで出土した半両銭は重さ1.25gと本来の四銖の半分をやや上まわる程度のものである。又貨泉も3・5等は2.65g、2.85gであるが、2は径もやや小さく、重さは1.30gとほぼ半分の重さである。重量を単位とする貨幣が鋳造時にいくらか出き損ないが生じるといつても、あまりにも単位の重さより軽すぎる。このような貨幣は後漢後半頃の経済混乱期に私鋳されたものではなかろうかと考える。

これら後漢後半期の混乱した時代に通行していた貨幣が、当時の日本側で青銅器の原材料を必要として移入されたものか、あるいは御床松原・新町等玄界灘に面した地域では交易で貨幣がもちこまれていたものか、いずれにしても弥生後期後半頃に流入した可能性が最も高い。

以上のこととは御床松原・新町遺跡出土の半両銭・貨泉について述べたことであって、半両銭・五銭・王莽銭のなかで鋳造後まもなくあるいは通行中に流入し、しかるべき遺構・遺物から出土し、弥生時代の年代の一端をうかがい知る資料も存在することはいうまでもない。しかしながら日本出土のこれらの貨幣の多くは弥生時代後期後半頃に流入したものが大半を占めよう。

註1 中山平次郎「九州北部に於ける先史原始両時代中間期間の遺物に就いて(一)」考古学雑誌7-10

1917

2. 志摩町教育委員会「御床松原遺跡」志摩町文化財調査報告書第3集 1983

志摩町教育委員会「新町遺跡」志摩町文化財調査報告書第7集 1987

3. 志摩町教育委員会「御床松原遺跡」1983

4. 中国科学院考古研究所「洛陽焼溝漢墓」1959

中国科学院考古研究所洛陽発掘隊「洛陽西郊漢墓発掘報告」考古学報 1963-2

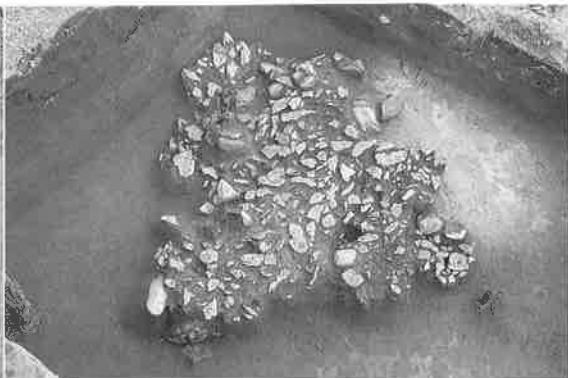
橋口達也「中国（戦国～漢代）における鉄器——とくに鉄製武器を中心として——」たら研究 第17号 1973

5. 中国科学院考古研究所「洛陽焼溝漢墓」1959

図 版



a II-01トレンチ



b II-01トレンチ 上石破損状態

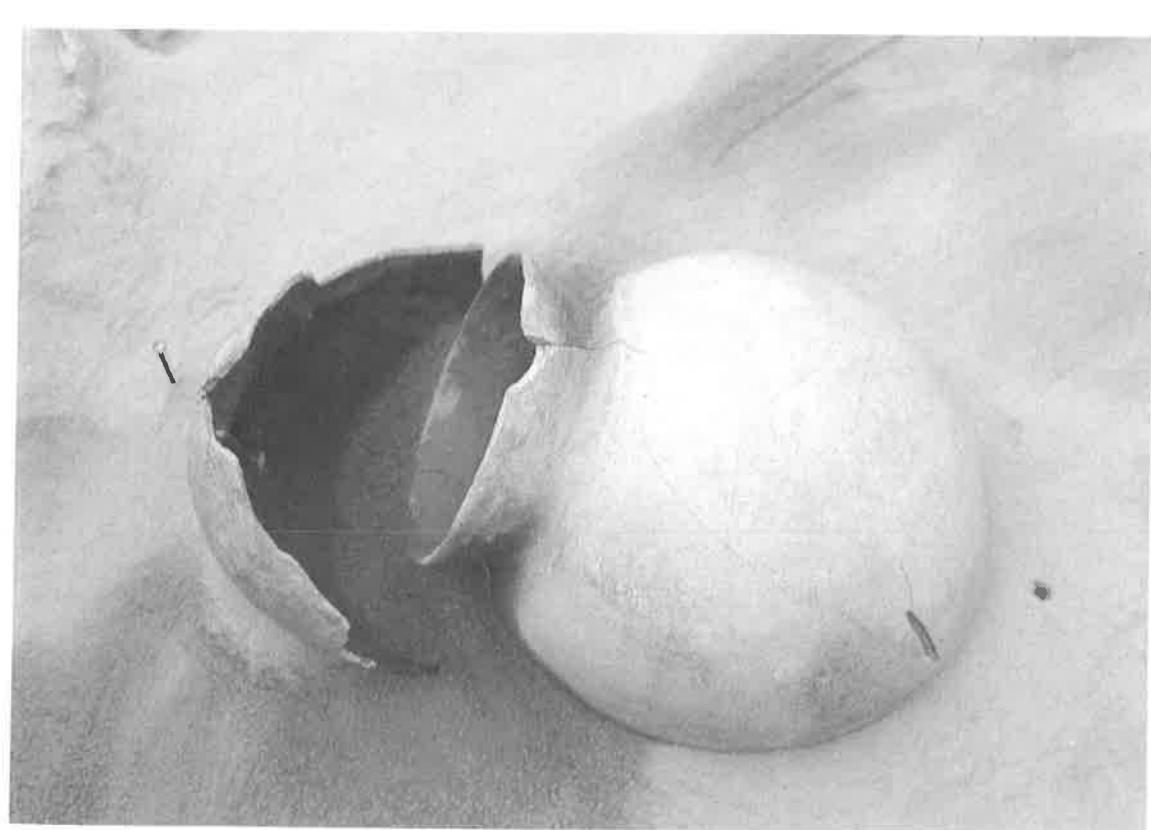
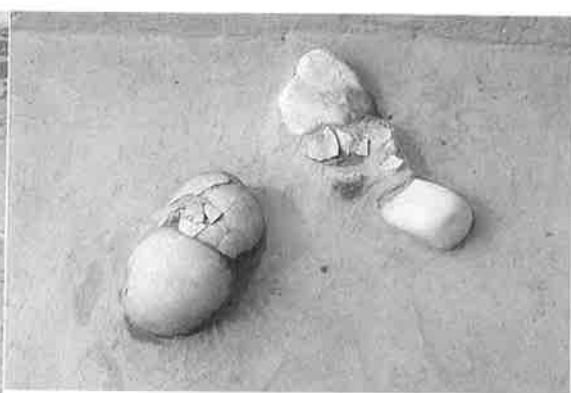


c II-01トレンチ 1号墓



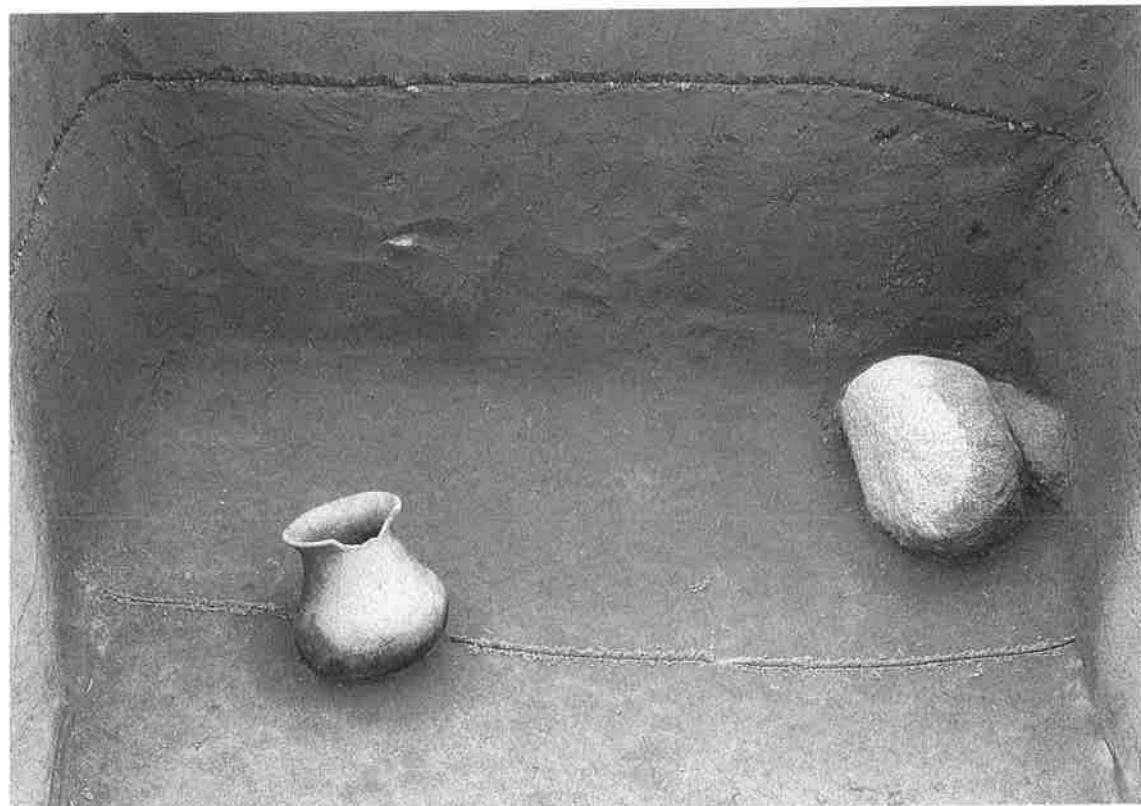
d II-01トレンチ 1・2号墓

図版 2





a II-02 b トレンチ

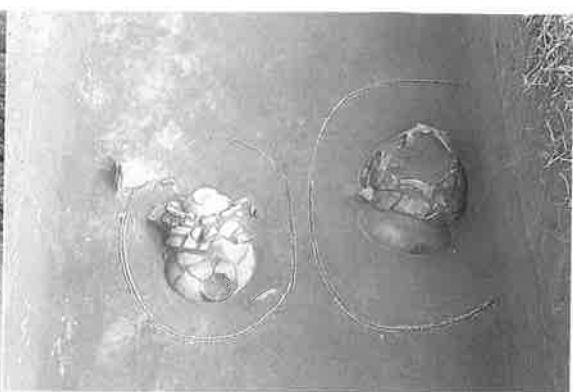


b II-02 b トレンチ 1号墓

図版 4



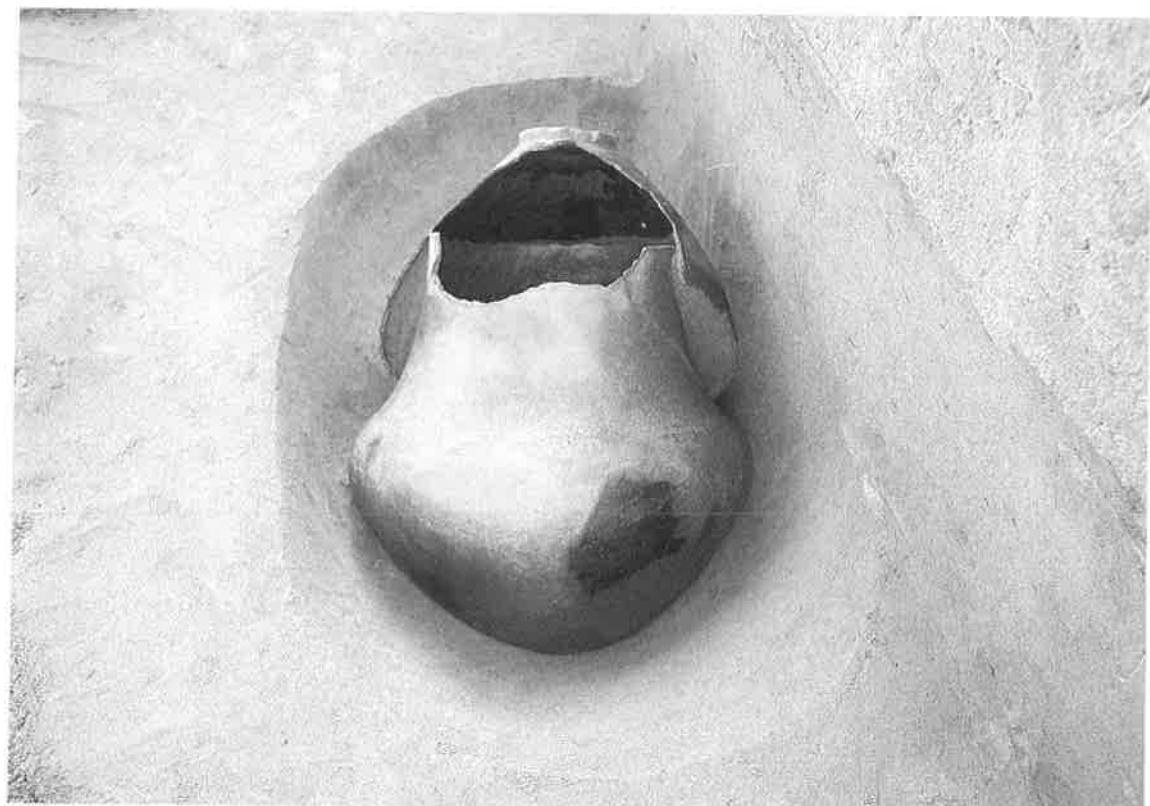
a II-03・05トレンチ



b II-05トレンチ 1・2号甕棺墓



c II-05トレンチ 1号甕棺墓



d II-05トレンチ 2号甕棺墓



a II-04 トレンチ



c II-06 トレンチ 東壁



b II-06 トレンチ



d II-06 トレンチ西壁



e II-07 トレンチ



f II-08 トレンチ



g II-10 トレンチ

図版 6



a II-09トレンチ



b II-09トレンチ 1号墓



d II-09トレンチ 3号



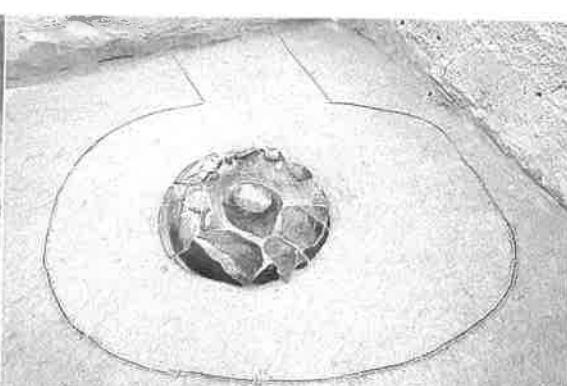
c II-09トレンチ 2号



e 半両銭出土状態



a II-09トレンチ 1号墓



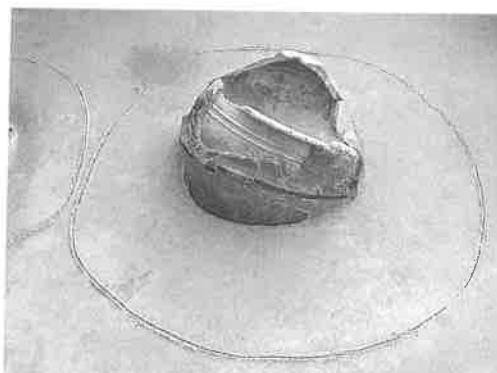
c II-09トレンチ 5号墓



b II-09トレンチ 1号墓



d II-09トレンチ 5号墓



e II-10トレンチ 1号墓



g II-12トレンチ



f II-10トレンチ 1号墓



h 半両銭



新町遺跡 II

志摩町文化財調査報告書
第8集

昭和63年3月31日

発行 志摩町教育委員会
福岡県糸島郡志摩町大字初30

印刷 株式会社西日本新聞印刷
福岡市中央区天神1丁目4番1号

